求道第一卷第八號

日次

◎信仰の門戸と堂奥　社說　菊池曉汀
◎佛教研究の方針を論ず　常盤大定
◎魔鏡　〈新刊紹介　改敎時報
◎編輯たより　記者
◎秋風錄
（一）京都　大須賀秀道
（二）金澤　八田鳴泡
（三）和新生
（四）在遼門　安藤正純

日曜講話
◎闇極まりて光を見る　近角常觀
◎信念と修養　前田懸雲

信仰問題
◎一青年信仰の告白　靜江一郎
◎獄中の人に與ふる書　近角常觀
◎出征軍人よりの返書
（一）塚木松之助
（二）窪田貞弐
（三）北條幸作
（四）太田文次

同一滋味
◎死するにあらず生まるる也　百目木劍虹
◎有絃無絃　無絃生
◎南村閑話　一記者

風尙餘韻

求道學舍

毎日曜午前九時より木郷森川町一番地に於て

第二求道會

毎土曜日午後二時より九段佛教倶樂部に於てあります

求道

第一卷
第八號

信仰の門戸と堂奥

念佛者は無碍の一道なり。うのいはれいかんとならば、信心の行者には、天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし。罪惡も業報も感ずることあたはず。諸善もおよぶことなきゆへに、無碍の一道なり。

嘆異鈔

釋尊一代の説教、八萬四千の法門は皆是信仰に入るの門戸也。若し一たび信仰の堂奥に達せむか、同一鹹味、唯絶對無碍の一道あるのみ、無限大悲の光明あるのみ。地を穿つものは、到る處清泉の迸發するを見む。若し深く一代の佛教を味はゞ、何れの經文を問はず、必ずや靈光の紙脊に横溢するを發見せむ、啻に經文のみならず、其求むること切實なるものは人生何れの處にか此靈光を認めざることやある。求めて若し徹底するに至りては、地下一面に瀰漫せる清淨なる靈泉の水層に達せむ是實に絶對眞實の信仰なるものに非ずや。若し此境に達せむか、信仰に程度なく、淺深なし、古の所謂絶對他力の信心は相異るなしと言へるもの決して偶然に非る也。

世の佛教を説くもの、多岐多端にして殆むど收拾すべからず、吾人亦經藏に入りて深く之を極むるに益々出て複雜なり。此に於てや、人皆之を統一せむことを望み、吾人亦之を概括せむことを企つ。古今の開教立宗の人皆之を試みざるはなし。然れども此の如きは哲學的に概括し、教理的に統一し、甲を揚げ乙を抑へ、丙を是とし丁を非とするに過ぎざる也。然れども吾人實驗の見地に立ちて此等諸種の説法に對せむか、其表面にあらはるる法門を追ふて之に屈托するときは、則ち門々不同にして八萬四千の區別あり、若し其門戸を排して一たび信仰の堂奥に昇らむか、唯絶對佛陀の光明あるのみ。何ぞ齷齪として判釋統一の煩はしきを要せむや。

吾人常に佛陀の聖敎に對す、其何れの經たるを問はず、靈光燦然として胸裡無限の感想を以て滿たさるゝこと彼此毫も異らず、而して自ら其間に何等の關係の存在するかを認むる能はず。常に自ら怪みたりき、吾人好みて釋尊の史傳を拜讀す、釋尊悉達太子として生老病死の人生問題を解決せむが爲に、沈痛憂悶、城を出て、山に入り、阿維邏樹多迦に道を求む。彼與ふるに冷かなる哲理を以てす。去つて苦行林中に百般の宗敎的經驗を試む、求めて遂に得ず。孤影瘦然尼連禪河に浴して菩提樹下に坐す、八萬四千の煩惱の魔軍太子を圍み攻む。靜觀悟入、忽ち八萬四千の大光明を放ち來りて大覺圓滿の妙位に上り玉ふ。吾人幾たび之を讀むと雖、實に宗敎的實驗の淵源として靈感湧き來りて盡くることあるなし。若し大乘の經典により て之を讀む、塵垢ありと示して金流に沐浴す。天、樹の枝を按じて池より磐出するを得しむと言ふ。何ぞ其景の壯嚴にして八相示現を透して本覺の明了を見る此の如く瞭々たる、若し南方所傳の佛傳を繙かむか、沙門瞿曇、皮肉相連り、踉蹌として地上に倒るると云ふ。何ぞ苦行疲勞人生を經驗するの極まれるや、吾人は彼を仰ぎて佛界の高きを觀じ、此を察して人生を感する極めて切實なり。而して彼と此と相矛盾せざるのみならず。人生を照す絕對の光明は吾人の胸中に宿りて、心琴に共鳴し來る、吾人は迦毘羅城に於ける釋尊の史傳を透して絕對無限の佛陀を拜するを得る了々分明なり。吾人は未だ何が故に此の如きかを知らず。然れども是信仰の心殿に於て實感し來る所、吾人敢て釋尊の如く實驗し得ると言はむや。亦吾人の及ぶべからざる境として思想已外に運ひ來るものならむや。唯偉大なる史傳を透して佛陀慈愛の救濟の示現するの極りなきを仰嘆し奉るのみ。

華嚴經に顯はれたる毘盧舍那佛は、實に佛陀菩提樹下に悟入し玉ひたる自覺の靈境ならくのみ。吾人は之を拜誦する每に如何に如來の境界の極なきかを嘆せずむはあらず。華藏世界の大なる、帝網重々の廣き、既に吾人の思想を超絕す。而して此の如きの境界忽ち一一微塵中に攝容し來りて、而も其間に普く身を現じ玉ふと云ふ。是畢竟佛智海の遍滿するの如何に微細なるかを事實の上に明示し來るもの、吾人は三世十方の諸佛及菩薩の森々として林の如く、燦然として星の如きを聞き、吾人の居る所、踏む所、皆是盡十方無碍の光明中に生活するを觀知せずむはあらず。而して法入界品の如きは實に此廣漠なる世界に於ける求道者善財童子の事實を叙する者。吾人は之を繙く每に、佛陀引導の深遠にして童子求道の堪忍不拔たるかに驚かずむは

あらず。童子初めて莊嚴幢婆羅林中大塔廟處に於て文殊菩薩に參し、念して曰く、身に忍辱の甲を被り、手に智慧の劍を提げ自在に魔軍を降し玉ふ。願くは我に援濟を垂れ玉へと、菩薩答て曰く、善哉、善哉、善男子道を求むる既に難し、菩薩の行を求むる倍更に難し。若し一切智を成就せむと欲せば決定して善知識を求むべし。善知識を求めて疲懈を生すること勿れ、善知識を見て厭足を生ずること勿れ、善知識の誨ふる所皆隨順すべし、善知識の善巧方便に於て過失を見ること勿れ、南方妙峯山中德雲比丘あり、汝往て問ふべしと。童子此語を聞き歡喜踊躍、頭頂足を禮し、慇懃に瞻仰し、悲泣流涕して辭し退きて南に行き、渴仰して德雲比丘を見むことを求む。此の如くして漸次五十三の知識に遇ふ。蓋し是百般社會の人士を盡したるもの。婆羅門あり、學者あり、長者あり、女子あり、童子就きて敎を受け悲泣景慕益々得る所あり。蓋し是れ求道者が複雜なる人生に處して到る處大なる修養を重ねむとするもの、取りて以て則とするを得べし。最後に至りて普賢菩薩の行願を得たり、功德圓滿にして、身心を莊嚴すること蓮華の如く、一切の塵垢に染まず。童子此功德海を聞き、歡喜信樂の心を生じ、疑を生ずる無し。菩薩最後に其行願を頌じて曰く。

悉遠離生死　諸魔煩惱業　猶日處虛空　蓮華不著水　偏行遊十方　敎化諸群生　除滅惡道苦　具足菩薩行　雖隨順世間　不捨菩薩道　盡未來際劫　具修普賢行　若有同行者　願常集一處　身口意善業　皆悉令同等　若遇善知識　開示普賢行　於此菩薩所　親近常不離　常見一切佛　菩薩衆圍繞　盡未來際劫　悉恭敬供養　守護諸佛法　讚嘆菩薩行　盡未來劫修　究竟普賢道　願我命終時　除滅諸障礙　面見阿彌陀　往生安樂國　生彼佛國已　成滿諸大願　阿彌陀如來　現前授我記　嚴淨普賢行　滿足文殊願　盡未來際劫　究竟菩薩行

文殊の智劍、普賢の行願、あらゆる華嚴の理想海は遂に西方彌陀佛の絕對光明の堂奧に導くの門戸たらさるはなし。蓋し宗敎は彼高遠悠久なる絕對の境と濁惡垢穢の人生とを結び付くるもの、若し絕對常に絕對にして人生の上に救濟の力を下さずむは宗敎として何等の功を見出すこと能はざるべし。而して彼絕對の靈境たる華嚴の佛智海と吾人現實の濁世とを連絡したるもの實に淨土敎の特色にして彌陀の願力は正さに其鉤鎖たらずむばあらず。華嚴經に曰く、文殊の法は常に爾り、法王は唯一法也。

一切無碍人一道より生死を出て玉へりと。而して親鸞聖人喝破して曰く、念佛者は無碍の一道也と。

原始佛教の教ふる所、ベナレスに五比丘に對して四諦の法を說き玉ふを以て、歷史的佛陀の初轉法輪と爲す。釋尊の家を出づる、生老病死の人生問題を以て其動機とす。而して成等正覺の曉多年の宿題を解き來りて其根本的愚昧を開き來り玉ひたるもの實に十二因緣也とす。而して最も適切に之を人に傳へたる說法は實に四諦の範疇也。吾人は阿含にあらはれたる釋尊が、三衣一鉢安詳として食を市に乞ひ玉へる風丰を想見せずむはあらず。人苟も苦悶の經驗あるもの一たび安慰の境に達せば、直ちに他の苦めるものに對して滿腹の同情を以て之を慰藉せずむはあらず。況んや大聖釋尊殆むと世界を燻べ去るの無明の黑烟を燒き來りて、三千世界を照耀するの光明を開き玉ふ。乃ち滿身の慈悲を以て先づ阿羅邏、欝多迦を度せむとし、彼等既に逝けるを見て、曩きに己を捨て去りし五比丘を度せむとす。道にウッバカに遇ふ、彼釋尊の容貌か喜悅を以て滿たされたるを見て驚き問ふ。佛答へ曰はく、我は凡てを服從し、凡てに通し、一點の垢穢なく、最高者となり、勝利者となり、我世界の闇を破らむが爲めにベナレスに向ふと以て如何に光顏の魏々たりしかを想像すべき也。又五比丘相誓て決して佛の爲めに事へざらむとす。佛近つき玉ふに及びて、期せずして之に奉事し且つ驚きて曰く、長老瞿曇、身色皮膚快好淸淨にして面目圓滿なり。光明麗しくして諸根寂定なり、必す妙好の甘露に遇ひ或は淸淨の聖道を得たるものなるべしと。吾人は當時釋尊が如何に解脫の靈境に達し玉ひ、一たび遇ひ奉るもの其光明を蒙り、安慰を得たるかを想見せずむばあらざる也。特にベナレス城內の富豪の子耶舍なる者一夜煩悶に堪へずして家を遁れ、城門を出て波羅那河畔に達す。時に天漸く白く、釋尊對岸にありて露地經行し玉ふ。耶舍遙かに望み叫て曰く、噫我惱めり。噫我恐怖せりと。釋尊之を憐み、耶舍に向て曰、善く來れり、善く來れり。汝耶舍、此處患なし、此處恐なし、此處安樂なり、此處自在なり。渡り來れ、汝耶舍、惱む勿れ、汝耶舍苦しむこと勿れと。實に是れ宛然彼の西岸上の召喚の聲にあらずや。吾人は佛弟子道に入るの史傳を討ぬるに其切實なる人生の實驗一々吾人の心絃に反響し來らざるはなし。吾人は必ずしも、四諦を悟ると言はず、阿羅漢道に同感すと云はむや。然れども和顏愛語、一點の曇なき釋尊の人格を透して無限絕對の光明か吾人苦惱の世界の上に射照し來るに至りては、彼華嚴海印三昧の光明と毫も異ることを認むる能はざる也。

吾人は一代佛教中に於て最も絕對的なる華嚴の佛陀と最も人生的なる阿含の佛陀とを擧げ來れり。而して此二者は兩極端にして彼此相容れざるが如き感あるも、是畢竟重々無盡の法門と四諦十二因緣と其門戶の異なるのみ。若し信仰の堂奧に上りて佛陀救濟の慈光に接し來らむか、啻に相容るゝのみならす。兩者ありて初めて絕對の靈境を知るべく、人生の救濟を知るべき也。故に其歷史的關係に於ても、一釋尊の實驗として各適當なる時間を見出すことを得べし。古來傳て曰く。佛成道後三七日菩提樹下にありて華嚴經を說き玉ふと、而して小乘律には亦佛成道後五七日樹下に靜觀して默坐し玉ふ。自ら以爲、我悟る所の法門甚深秘密にして恐くば衆生に領解せしむること難かるべしと。梵天帝釋請ふに及び、倩々衆生の根機を察するに水花白蓮の水中に生して水面に達せざるが如きあり、恰も水面に達せるあり、水面遠く離れて高く上れるが如きあり。乃ち其根機に隨ひ法を說かむと欲して初めて樹下を起ち玉ふと。知るべし、此五七日の靜觀は恰も是華嚴海印三昧の舞臺にして、現時華嚴經の本文の如きは、後年其悟入の境界を試みに文字に顯はしたるもの。宜哉古來華嚴の經卷を以て眞個の華嚴の境界の萬一を寫す能はずと云ふこと。後年稱して大乘と云ひ、原始的佛教と云ふが如きは畢竟法門の相違、門戶の區別、地方的分類、歷史的區分のみ。若し其堂奧に入りて絕對の光明に接觸し來らむか、何ぞ華嚴と阿含との區別あらむ。況んや大乘と小乘とをや。

方等諸經に諸の佛諸の菩薩、諸の願、諸の淨土等を說くこと頗る複雜也。是皆佛陀の靈境の各部を描き、靈界に於ける諸の人格を描きたるもの。吾人は一々之を味ひ來らば、靈界の威力森々として吾人を護持養育するの如何に周到なるかに感謝せずむばあらず。然れども吾人は決して各別に此等の人格を禮拜せざるべからざるにあらず。何れも是絕對なる佛陀の中心に統一せられ了んぬ。諸の佛陀は各種の場合に應じて救濟を下し玉ひし人格也諸の菩薩は佛陀の各種の屬性の結晶せる者、文殊菩薩は智慧の權化にして觀音大士は慈悲の示現也。故に吾人若し彼絕對佛陀の根本に向て信仰し來らば忽ち彼諸佛菩薩を包容し來る。故に曰く、一佛に歸するは即一切佛に歸する也。一佛を信ずるは即一切佛を信する也。と、故に若し一佛に歸し、一佛を信ずるときは、一切の佛菩薩は之を證誠護念し、之を護持養育し玉ふ、啻

に一切の佛菩薩のみならず、天神地祇を初めとして山河大地日月星辰に至るまで之を護持養育し玉ふ。親鸞聖人日藏經、月藏經の所說を以て之を證して曰く。信心の行者には天神地祇も尊敬し、魔界外道も障礙することあたはず。罪惡も業報を感ずる能はず諸善も及ぶことあたはざる故に無碍の一道也と。

般若諸部は是佛陀の眞智を詳說したるもの、特に大般若六百卷の如きに至りては、吾人は其浩瀚なるに驚かずむばあらず。吾人嘗て其一部を閲讀するに、必ず同一の意義を反覆すること頗る丁寧、吾人は寧ろ其煩に堪へざらむとせり。然れども吾人は之を反覆するの間に深き意味の存在するを悟るを得たり。若し空を說かむとするや、或は五蘊の上に、或は十二處の上に、或は合し、或は別ち、出來得べき限り之を反覆す。若し淸淨を說かむとするや、之を五根の上に、五境の上に、乃至一切諸法の上に於てす。若し吾人心を潛めて之を讀誦するや、初めは自ら何等の意義を悟らざるものと雖、久しくして空若くは淸淨の實感を生じ來りて、眼前幾多の事物の上に眞智を生じ來る。蓋し是れ、修行修養の問題として頗る意義を有するものと謂ふべし。嘗て聞く、玄奘三藏此經を譯せむとするや、之を簡約せむことを企つ。靈夢を感ずる所あり、原文の如く少しも節約せざりしと言ふ。是頗る意義の深長なるを覺ふ。若し其意味を以てせば一紙の心經之を盡して餘あり。然れども若し佛智靈境の眞味を開き來るに及びては、幾度之を反覆するも猶以て足れりとせざる也。吾人私かに以爲らく、大般若六百卷は彼の八十華嚴若くは六十華嚴と共に佛境界の偉大なるを文字の上に顯現し來りたるもの。華嚴は之を事相の上に顯はし去り、般若は之を理智の上に詳說し來る。彼華嚴世界の廣漠極りなきが如く、般若の眞智深遠にして測るべからざる也。而して華嚴に文殊の人格を說けるが如く、般若は文殊の智慧を說けるもの。而して華嚴は結局彌陀の淨土に引導するが如く、般若の智慧は諸の陀羅尼に攝し、諸の陀羅尼は根本佛陀の名字即念佛に攝し來る。看よ大般若六百卷も結局信仰の堂奧に入るの門戸に非ずや、親鸞聖人が念佛は無碍の一道と云ひ法然聖人が利劍即是彌陀名號と云へるもの決して偶然に非る也。

法華經は彼小乘的法門と大乘的法門との調和したるものにして、久遠實成の絕對の佛陀を顯はし來り、涅槃經は佛陀滅廢の時に臨みて法身常住の旨を諭し玉ふ。蓋し兩經の文字は何れも絕對の境を開顯するに大に力を用ゐたるもの、吾人は法華經を

繙く毎に常に佛陀慈愛の大なるに感泣するもの也。彼の長者窮子の譬喩の如き之を顯はし來りて餘蘊なし、嬾鈴辛苦五十餘年と言ふもの、如來慈親の佛子を求め玉ふの極を示すもの也。藥草品の如き、化城喩品の如き哀々たる佛陀の善巧方便を示すもの、壽量品に至りては釋尊の本門を開顯して、塵點久遠劫來の絕對の佛陀たるを示し玉ふ、是即無量壽佛也と云ふもの親鸞聖人の見地にあらずや、而して涅槃經に於ては亦法身常住無有變易の靈境を說きて涅槃の眞證を示し玉ふ。而して此境たるや即是實相なり、法性なり、眞如なり、如來なり、是吾人が現世肉の生活を終りて後永久不變の理想として、所謂極樂淨土の眞證なる者、經に虛無之身無極之體を得ると云へるは、此無上涅槃の眞境を指せる也。此に至りて宗敎最高の理想に達せりと謂つべきか。且佛涅槃に臨みて阿闍世王が自己の罪惡の爲めに身心一大苦悶に陷り、非常なる懺愧を捧げ、遂に如來月愛三昧の光明に照されて先づ身の病癒ゑ、次て如來慈光の攝取によりて一大安慰の境に達し、遂に無根の信を生ずるが如きは、信仰の堂奧を露はし來りて余蘊なきもの。王舍城中の悲劇は遂に信仰緣熟の門戸たることを示し玉ふ。實に法華の如き、涅槃の如き人を導きて門戸より秘奧の極に達せるもの、此に至りて無限絕對の光明は千古靈鷲山頭を照して長へに吾人を惠み玉ふ。嗚呼實に渴仰に堪へざる也。

讀去り、讀み來れば釋尊一代の說敎、唯一佛陀の光明あるのみ。盡十方無碍光如來の救濟あるのみ。然れども吾人は單に解釋的に之を說くにあらず、哲學的に之を論するにあらず、歷史的に之を攻證するにあらず、又獨斷的に斷言するに非ざる也。唯之を味ふ、獨り實驗的の內的經過に於て之を自覺するに在るのみ。而も其實驗たるや、作法に隨て結跏趺坐以て靜觀を試みるも可なり。規律の如く奮勵努力實行を企つる亦可なりと雖、此の如きは故意の實驗、猶不自然たるを免れず。吾人は斷言す。宗敎の眞意義は人生問題の實際に接觸して初めて其靈光を發揮し來るに在り。若し人苦悶の中に陷り、內心幾多の憂悲苦惱を抱きて、口言ふあたはず、身行く能はず、久しくして佛陀の慈悲に接觸し、煩悶宿夢の如く消し去り、歡喜の情胸に滿つるに至りたる時は、釋尊及佛弟子の史傳の上にあらはれたる佛陀の救濟を感ずるを得べき也。必すしも四諦を觀ずるにもあらず、必すしも十二因緣觀を追ふものにあらず、然れども唯人生苦痛の根本たる無明自ら晴れて心中確かに八萬四千の靈光を拜する

を得べし。若人眞摯に道を求めば切實なる事彼善財童子が如くせよ、而して人世幾多の出來事、親疎百般の人物、優に皆修養の材料に供するを得む、蓋し吾人若し求めて止まざれば、遂に佛陀靈境の廣大にして思議すべからざるを嘆じ、又吾人の爲すなきを悟りて佛陀慈愛の靈光に接し、最後に萬德圓滿の地に達せむ。特に文殊菩薩の智慧、觀音大士の慈悲、影を人生に顯はし、力を實際の問題に顯はす。此に於てや、靈界の威神を感する益々多くして、諸佛菩薩の護持養育如何に周遍せるかを驚かずむばあらず。而して此等の大士は吾人を導きて人生の行路を辿らしめ、最後に絶對の光明に接觸せしめ玉ふ。洪恩亦偉大なる哉、特に經卷陀夢尼を書寫讀誦し、念佛を執持して、其功德の廣大なるに驚き、唯々佛力の測るべからざるを感知し、自然法爾、全く自己をすて、佛陀の計ひに任すにる至る。凡て此の如きは八萬四千の法門を其說の如く力行せんとするの結果、或は自己の爲すなきを悟り、唯佛力の依るべきに感激して遂に絶對の信仰に入る、故に知る、八萬四千の法門は唯人を信仰の堂奧に導くの門戸に過ぎざることを、法華經の長者窮子の譬喩、化城喩品の如きは其方便引入を喩へたるもの、而して涅槃經の阿闍世の如きは罪惡却て是れ信仰に入るの門戸たり。蓋し罪惡を自覺して佛陀大悲の仰くべきを知らば他の精進力行の人が入れる絶對の信仰と毫も異ることなし　宜なる哉、親鸞聖人信仰の一點に至りては先師法然上人と撰ふことなきを主張せられたるや、たとひ精進力行の人と雖、若し猶自己の爲すなきを自覺せざる限りは未だ絶對の光明は輝き來らざる也。吾人倩々自己を顧るに、惡として一惡をも缺けたるものなく、善として一善をも修すべからず。父母に對して孝養すら爲すあたはず。唱へ安き念佛すら唱ふる能はず。此に於てや、吾人は憍慢の甲冑を脫し、自力の劍戟を擲ち五躰を佛陀の足下に投じて求哀懺悔せざるべからざる也。是實に觀無量壽經に顯はれたる彌陀願力の救濟を實現し來りたる者、人若し一たび攝取の光明に遇ひたる時は、觀世音菩薩大勢至菩薩其勝友として遂に佛陀の家に生るべしと。是れ嘗て自力に於ては爲すべからざる彼華嚴に於ける文殊の發願普賢の行願を、唯一信仰の力によりて絶對他力の光明の中に悠々として實行するものにあらずや。而して最終最高の理想は極樂淨土に於ける大般涅槃の靈境に入り普賢の德を修する也、蓋し吾人の人生にあるや山間忽ち落ち來れる一輪の花の如きか、溪流に入り、浮沈迂回、長江萬里洋々として流に從て遂に彼岸に達するを得べし。人生百歲亦此の如きか、親鸞聖人信仰的生活を詠じて曰、大悲の願船に乘じて光明の廣海に泛ひぬれば、至德の風靜かに、衆禍の波轉ず、即ち無明の闇を破り、速かに無量光明土に到り、大般涅槃を證し。普賢の德に遊ふ也。

佛教攻究の方針を論ず

常盤大定

世に突如として起伏するものなく、一切悉く是因緣所生の法に非るはなし、況んや人心の幾微に觸れ、吾人の生命を左右する宗教に至りては、豈突如として起伏し、飄忽として出沒するものならんや、時勢は大人を生じ、而も大人は時勢を作る、釋尊の出誕や偶然ならざりき、佛教の興起や因緣深かりき、若し當時の時代精神を知らずんば、釋尊出誕の際に於ける天地の感應は解し難き奇怪の文字にして、四十五の隨器開導は唯是好事の沙汰となり了せんのみ、當時の時勢如何かを知る、政界國勢の變遷より、社會組織の不平より、婆羅門教の宿弊より、思想界の亂調より、是等諸種の方面より觀察酌了して、以て庶くは當時の時勢觀を形成するを得ん、之を爲さずして、直に之を云々するは、是必竟根據なき臆說ならくのみ、現時佛教の學者幾百を以て數ふべし、果して能く思をこゝに運ぶもの果して幾人ぞ。

三國に亙り三千年を貫く佛教の研究たる、其何れの部分を執り來るも、興味を惹く事多かるべしと雖、吾人佛徒に取りて重要の關係を有するものを印度佛教と爲す、印度は實に是佛教の發源又成果の地なり、苟くも佛教を調査せんとするもの先づ指を印度に染むるを以て極めて適當の措置と爲す、然れども印度民族は沒史的思想を有する民族にして、隨て印度は元來非歷史國なり、歷史なきを以て史上の事實悉く曖昧朦朧となるを免れず、研鑽を積むに隨ひ、益暗澹の境に入り、遂に五里霧中の歎聲を發せしむるは世に印度研究に如くものなからん、されど暗澹朦朧の中津々たる興味を感ぜしむるも亦印度の研究に加ふるものなし、是必竟吾人佛徒に取りて必須の關係あるが爲なりとす、印度佛教調査の方法や如何、宗教は人生中心の事實なるを以て、素より文學にも哲學にも科學にも不可離の關係を有するもの、就中印度の如く是等の諸科悉く合糅して、宗教の中に哲學科學文學を含藏する地にありては、必然の勢としてこゝに留意する所なかるべからず、こゝを以て苟くも印度佛教の眞面目を發揮せんとせば、諸種の文學を調査するの要あり、各派の哲學を攻究するの要あり、殊に印度の國民教たる婆羅門教の古今を研究するの要あり、是等の中に就きて、婆羅門教と佛教との交渉を調査する事尤も必要と爲す。

外道の一語何ぞ吾人を誤れるの甚しき、吾人は外道なるものは淺薄取るに足らざるもの、迷妄の甚しきもの、一顧の價値だもなきものゝ如く教へられたり、從て佛教は突如天來のもの、唯我獨尊のもの、一言半句も悉く是金科玉條たるべきものと教へられたり、吾人に取りてはげにや獨尊のもの、一言半句も甚深のものたる事は、是素より然るべし、然れども究如天來のものとの思想に至りては大に不可なり、從て外道を以て一顧の價値なきものと爲すも大に誤れり、釋尊の出家成道說法し玉へるや豈突如ならん偶然ならん、之と同じく馬鳴龍樹も亦偶然にして起らざりしなり、無着世親も亦突如として來らざりしなり、是に於てか當時の時勢觀を究め、外道

諸學との關係交渉を明らむる事、第一着の必要として吾人の心頭を突き來る。

印度は無類の古國なり、世界最古の寶典たる吠陀を有す、吠陀の書たる、印度文明の母にして同時に世界文明史上重要無比のものたり、四大河が無熱池より流出するが如く、印度の諸學は悉く吠陀に發源す、佛敎は勿論吠陀の聖權を認めずと雖、之が研究には印度文明の母たる此古典を計算外に置くべからざる自然の數なり、吠陀既に捨つべからずとせば、順序をして之に次て來るものは婆羅門敎なり、佛敎の原理や婆羅門敎のそれと天地の差あるは古來傳ふる所の如しと雖、根本原理を除く他の文學中には、婆羅門敎を外にして解すべからざるもの少からず、是を以て此二敎の交渉に至りてや、入出々入の狀なくんばあらず、佛敎の影響は、佛敎以前の婆羅門敎と、佛敎以後の婆羅門敎との間に、天地の差異を生ぜしめたるにあらずや、之と同じく、婆羅門敎の影響は、又該敎復興以前の佛敎と、復興以後の佛敎との間に、面目の一變を來さしめしに非ずや、佛敎中殊に此影響を受けたるものを、眞言陀羅尼佛敎と爲す、若し夫れ復興以後の婆羅門敎乃ち印度敎を知らずして、眞言佛敎を解せんとする人あらば、吾人其徒勞を笑はんのみ、佛敎と交渉を有するもの、啻に婆羅門敎に限らず、數論といひ、勝論といひ、彌曼瑳といひ、吠檀多といひ、燦爛たる光彩を放つ所謂六派哲學、亦是佛敎と交渉なくんばあらず、中に於て最も古くして尤も原始佛敎と關係深きものを數論と爲す、是に於てかカピラを攻究するは、吾人に取りてプラトンの攻究よりも、趣味深くして且つ重要なる意味を有するを見る、之に次ぐものを尼耶々派と爲す、亦是佛敎因明の攻究上看過すべからざるものにして、因明研究の出立點は實にゴータマに存することを忘るべからず、其他彌曼瑳派と佛敎の儀禮との關係、吠檀多派と佛敎の汎神論との關係を見んには、チャヤイミン、バーダラーヤナ、の研究を要し勝論と俱舍との因緣、瑜伽派と瑜伽觀行との因緣を明らめんには、又先づカナーダ、パターンチャリを明らむるの要あり、觀去り觀來れば悉く是攻究の好題目ならざるはなし、關係といひ、因緣といふ、是果して彼を起せしか、彼果して之を喚びしか、其前後を論じ、其起結を究むるは佛敎史上重要の事項にして之を究め來らば前人未發の味解を來す事少からざるべし、例を取りて之を示さんか、古來起信論を以て數論に酷似せりといふ、若し漢譯全七十論と十句義論との中に就て、起信論との類似を論せば、其數論に類似する素より其所なれども、一たび吠檀多の骨髓を究め來り、遡りて鄔波尼沙土の中心を執へ來りて、之を起信論に比較せば、其類似曷んぞ數論と同日にして談すべけんや、是に於てかバーダラーヤナの史的位置を定むる事は、佛敎徒に取りて樞要且つ不容易の問題にして、其趣味はピタゴラスの年代攻究よりも遙に大なり、又彼因明に於て、五分作法の一例として、屢々耳にする「聲は無常なり云云」の如き、吾人は現今の論理書に於ける「人は動物なり云云」の例の如く、單に說明の爲のものゝみと思へり、近來彌曼瑳の主張を討ね來るに及んで、佛敎因明家が聲の無常を立せる趣旨、初て氷釋し、こゝに於てか、此論法や、單に五分作法を說明するのみの具にあらずして、偉大

なる自由思想を含むを知り、此例に對する興味を感ずる事極めて深くなり來りぬ、是は唯其一例を擧げたるのみ、實に印度研究の趣味や吾人佛徒に取りて甚深無盡のものあり。

印度研究は十九世紀に於て起れる新學なりと雖、其進歩の著しき驚くべきものあり、而して研究の進むに從ひ、ろの關係する所益々廣きを加へ來りぬ、げにや其言語に於ては人種の連鎖によりて西歐諸洲と同脉を有し、其思想に於ては宗敎の媒介によりて東洋諸國と同系の中にあり、吠陀の研究は比較神話學を起して以て宗敎學の基礎を成し、鄔波尼沙土の哲學が陶然としてショーペンハワーを醉はしめ、是實に生前死後の慰藉なりと絶叫せしめて以來、印度研究の勢力滔々として歐米の學者社會を風靡し、隨て佛敎の講究も亦大に進捗す見よ彼等今や南方佛敎の典籍を調査し盡して、往々にして指を北方佛敎に染むるものあるにあらずや、彼漢譯藏經の如きは吾人にありてすら讀講に難んずるものあり、況んや外人にありては其困難いふべからざるものあらん、而も此困難に堪へつゝ漸々研究の手を北方佛敎に擴め來る、苟くも佛敎研究を以て任ぜんとするもの豈怛悅たらざらんや。

廣袤幾千里に亙り、上下三千載を貫く佛敎や、隆替消長老いては又若がへり、明滅斷續盛にしては又衰ふ、傳燈瀉瓶の跡綿々として討ぬべきも、同の中に異あり、異の中に同あり同一原理も世態人情の如何によりて、或は主意的？發現せる事あり、或は主意的に表象せられし事ありき、是を以て平安時代の精神を知らずんば平安佛敎の面影を發揮する事難く、鎌倉時代の思潮を知らずんば、鎌倉佛敎の中心を把捉する事難きと同じく、釋尊時代の社會を知らずんば、佛敎興起の因緣さへも了得する事難く、龍樹世親の時勢を知らずんば、龍樹世親の論釋を理解すること難からん、現時佛敎の攻究法亦昔日の如くならざるべし、而も能く時代精神との交渉より、之が開發を企圖するもの果して幾人ぞ、新進の學風を以て標榜する佛敎の大學にありてすら、能く此方針を確立し、以て印度佛敎の眞相を發揮せんとするものありやなしや、吾人此點に於て憾みなきを得す。

日曜講話

闇極まりて光を見る

近角常觀述

從來この求道會へ御出席の御方はよく御存知のことでありますが、今日は今年この學年になつて始めての會でありますから、今一應改めてこの會を開いたわけを御話いたします、既に本郷森川町に求道學舍を開きましてから丁度此年で滿二年になります、又こゝで第二の求道會を開きましてから殆んと一年になりますが、ろの間に多くの人々と一所に信仰を喜ばしてもらうて難有思ひます、すでに名の如く道を求むると言ふ考でこの會を開きましたが、道を求むるとは未だ信仰を得ざる路に於てばかりでなく、猶廣い意味に見てその極に至る

まで求めてやまぬ、即ち飽くまで人間の生活する限りはこの求道をしたい、この意味に於てこの會を開いたのでありますもはや御經驗の人とまた何か得たいと切實な御望の方は、この會でそれを得て共に喜びたいと思ひまして一年間御話してまゐりました所、道を求める機運は益々多くなつて來まして中々一二に止まりません、出來得る限りその機運に出逢ひ愈堅固に進みたいと希望します。

いつも同じ事を申すのでありますが極要點は、從來宗敎の敎理から見るのでなく、求むるもの丶方面より佛陀の光に接し之を味はふと言ふ方面よりして求めたい、即ちその光を自分で實驗して感じてゆく味ひを御話して居りました。

本日の題は闇極りて光を見ると出して置きました、殊に今日の御話は實際の經驗上宗敎の光に出逢ふと言ふ事で、今ろれをかりに分けて言ふて見れば、主觀的に吾々の內心に苦み極まりて安慰を求める、主觀的にそうあるのみならず、客觀的に於ても人生の總ての道が人力の及ばざる所まで及び盡して遂に佛陀の光に逢ふて勇猛直進して進むと云ふ、原より實際主觀客觀など分けられるものではないが、かりに分けるとすればそうである。

東京で一個月のやすみの間にあちらこちら地方を廻りましたが、その間にすでに信仰を得られた人や、得らるゝ人々を見聞したことを御話して、從來御出席の御方には御みやげとし、又その外の御方には栞として聞いて戴きたいと思ひます。

宗敎の敎にるところはそうむつかしい道理はあるものではない、煉瓦で疊み上げたやうな四角四面な道理詰でなければならぬと思ふ、そんなものは眞の宗敎の命ではないのである、然れば如何なれば宗敎を自分の身の上に体達するか、實際人生を經驗しゆくと中々人生は吾々の內心でかれこれ思ふ樣でもなく、また社會そのものもそういふものではない、種々と考へれは考へる程接すれば接する程ます〳〵複雜になりゆくあれも分らぬこれも解けぬそうなると段々苦しくなつてくる、終には考へて居る自分まで分らぬやうになつて世はあげて不可解となり、心益々悶ゑ狂ふ、即ち佛敎の煩惱苦痛の淵に沈みきつて四面暗澹としてものすごくなる、その極最後に不可思議にも佛陀の慈愛の光に逢ひその偉大なる力を仰き得て茲に始めて大安慰を得るのである、私もその經驗によつて來ましたが洵に人生は人間のあらゆる十分の考を以ても到底解釋は出來ない、今日普通の宗敎の意味で言へば、人間は種々理屈をたて丶一つの假定をつくり、その假定から漸次おし進めてゆくが遂に理屈では結局分らぬと言ふ、その最後に到つてその理屈では分らぬ、人生の奥に理屈已外に一の偉大なる力があることに始めて氣がつく、人に滿足を與へたいと思ふてもその通にならず、こちらでは種々思ふても向ふでは左程に考へてくれぬこゝに人生をうらみ、なさけなく思ひ、あじきなくなる、都合によると自らも死にたいと言ふ考も出てくる、極端になれば人をも害せんと言ふ惡心を搆える心も起らんでもない、人間は人に對して絕對的によくする事は到底出來ぬと同じく、人も自分に對して絕對的に思ふてくれぬものであることが分つてくる、乃ちその最後は人を相手にしたりする事は到底出來ぬ、望まれぬと言ふことになる、けれども人はその點に滿足することは出來ぬ、心の不安は愈々不安、世間は依然として冷淡である、心のうち何か得たい即ち絕對的の滿足を得されば苦るしい、たまらぬ、然るに一朝首を回らせば慈悲のかたまりが佛である、佛陀の力であることにふと氣がつく、絕對の安慰は茲に到つて始めて得られるのである、口で申すときは言葉は浮いて居るが、實際に於ては油然として佛陀の光は、直射し來るのである、その偉大なる無碍の光の照覽を得てこれより人生にのり出して往くときは人生のあらゆることひとつとして快ならざるはない。

道德上の問題についても實際道德倫理の嚴しい規則の通り之を行はうとしても、心に思ふ所と口に言ふ所と身に行ふ所ひとつとして完全にする事は出來ない、眞に親孝行も出來ぬやうになる、高尙な理想を以てゆかんとすれば、人間は一日もこの世に生活する事は出來ぬやうになる、それを實際眞面目に行はうとして見て力つきたるとき人生の極限はこゝであると實驗し來るときに、始めて佛陀の偉大なる力はあらはれ、光は輝くのである、かくの如く佛陀の力を感じ來るときは從來の人間の微弱なる力は一時に破られてしまひ、唯ひとり佛陀の偉大なる慈愛の力によりて再び人生にのり出すのである、今や到る所に安慰を得、一歩は一歩より力つよく進むやうになる。

苟も人生のどの方面に於ても心まじめに出かけて見るときは即ち人生は如何なるものなるかについてれしすゝめて往けば、その最後に必ずや一の光を認め來る、乃ちそれに安住するのである、これ等の消息はすでに御經驗の方もあらうし、實は說明は不可能である、佛の力を感じ來るときの味は殆んど何と言ふてよいか到底形容すべからざるれもひがある。

全体信仰の光に出逢ふと言ふことはその求むる態度の如何をとはず、人生の極致に至つてヒョット光を見れば直に宗敎に入り來るのであります。

この夏私の歩るきました東北地方陸中花卷附近の夏期講習會で、一人の青年がうるはしく信仰を得られた實例を見ました、その人は多年家庭にあつて苦るしんで居つて、その極非常な煩悶に陷つて居つたのが、偶然佛敎の講習會へ出て來て私が歎異鈔の講義をして居つたのを聞いて、その二日目に堅固なる信念を得てしまはれた、苦しむ事が信仰でないが、苦しんで居る人は信仰に近つく人であつて、その人はやがて安慰を得る人である、何にも恐れる事はない、今に活路はひらかれるのである、年十七歳の一青年が佛陀の光に逢ふて味はれたその味ひは私が十年來の信仰と少しも變らぬ、その三日目に告白してかへられたが實に私は感想を深くした、（信仰問題欄參照）如何なる家庭でも人間の理想通りの滿足は得られぬことが分り、自分の不完全にろの他萬事につき親しく見て下さると言ふ、偉大なる慈愛にこちらが向へば、こちらの齒かたゝぬその慈愛のうちに身も心も入りて佛陀と一樣になる、その一樣になつた心を以てこの人生にふりかへり見れば、これまでは何事もいやいやして居つた事がいつの間にやら、自然に手も出て脚も動き心も活き〳〵して働くやうになる、佛陀の偉大なる力によりて見ればモー何事も言ふ事はない、たとひ自分の力は從來の如く不完全微弱でも佛陀の慈愛により

て手を動かし脚をあげて往けば、世界到る處更に何等の障碍はないのである、これやがてトルストイの無抵抗主義のその極に同化するもので、且つ其の光と一致して、他に向ふときに始めて力强く何事も出來るのである。

宗教は山に入りて山より出ずる、一度光を得てこの人生に還れば自分は一人の自分にあらず、自分の言ふ所は偉大なるものと自分と一所に居ると言ふ思ひを以て進むから如何なる苦しみをもたやすくきりはらひ、どんな事でもやすく出來る。

浮世は依然たる浮世、人生は舊によりて人生であるが、それを見る自分の根底に於てすでに安慰の上に坐して居ることに於て、もはや活ける人生浮世となるのである。

昔親鸞聖人は自分の信仰を言はるゝのに、自分の信心と我師法然上人の信心も同じ事であると話された所、門弟の面々は、イヤそんな筈はない、我師學德並びなき法然上人と一弟子の善信房の信心とどうしてひとつであらうや、心得ぬことを言ふとて之を師匠法然上人につげまゐらす所、法然上人の言はれるのに、善信房の信心も如來より賜はらせ給ふ我信心も如來より賜ふところの信心なればさらに變るところなくひとつなり、信心のかはりあふておはしまさんひとはわがまゐらん淨土へはよもまゐり給はじよく心得ふべし、とこれはむかしから聞く話ではありますが、今日深くこれを感ずるのである、抑も信仰に程度を見るとは誤れるの甚しきものである、信仰は無程度絶對的のものである、學問の有無、年の多い少いにはすこしもかゝはらぬのである、たとひ今迄如何なる罪惡をしたものでも一たび佛陀の慈愛によれば、その有樣は丁度ある道德家が苦悶して終に信仰の門に入つたものと少しも變らぬ全く一である、道德家でも罪惡の人でもこゝに到れば程度も何にもないは眞に不可思議であります、一青年の信仰も多年經驗して來た私の信仰も更に變らぬのである、信仰は決して人より得るものではもい、信仰を得るとはそのひとがどうしてもそれを得なければならぬ一大機運が熟して來たから茲に佛の光に逢ふて大安慰を得るのである、親鸞聖人は、わが弟子は一人もなしわが弟子人の弟子など言ふは極めたる荒涼の事であると言はれた、又如來より賜はりた信心を我もの顏にするとも言はれた、これだけでは諸君はこう思はれるであらう、それは安慰と言ふは內心に變化したもので客觀的に偉大なる佛陀慈愛の力の存在は如何しいとの御考があらうと思ふ、信仰は原より主觀的客觀的など區別は立てられぬが、自分が一度苦悶に陷入り絶躰絶命の場合にさしせまると實にこの內心に佛陀の慈愛を感じ來る、內心得られたるのみならず、客觀にその偉大なる力を認め來るのである、自分の身一度世の紛糾錯雜なるラベレンス即ち大なる謎の中にはまり來るるのときに、正に佛陀の力に安住して往く、道のあるなしにかゝはらず、自分微かなる計ひをもちひず、しかも將に來らんとする結果の善か惡かに目をとめず、まつすぐに進み進むとき、たしかに一道の活路の開かるゝ事を私は見る、これについては多くの實例がありますが、そのうちひとつ、信濃の人てかねて信仰について喜んで居られて私に度々手紙をくれられすでに求道の七號にも出して置きました北條幸作と言ふ人てあるが此度出征して金州城占領のとき露兵の逆襲に逢ひ重傷を負ひ無事歸國して今は澁谷豫備病院に居られるが、過日私は見舞ひに往つて親しく手を握り涙と共にその當時の話を聞いて來ました、去る七月廿七日の夕偶然露兵の逆襲に逢ひ多くの戰友は斃れ自分大腿に重傷を負ひそこに倒れまた立つ事も出來ぬ、時すでに夜陰敵益々よせ來るけはひすさまじく、慘憺たるこの光景中ひとり目を開き耳を澄まして居ると、ひらめくつるぎを手にする露兵は累々たる尸屍を一々檢し、我兵の負傷して猶息あるものは、胸といはず腹といはず、無殘にもズブズブ刺して死に到らしめ總べて息の根をとめて廿八日の朝引上げし樣子、そのときの自分の心のうちは何に譬ふにものなく、今か今かと思ふて安き心もなかつた自分が一體どういふわけて一命がたすかつたか不思議にたえぬ、自分は丁度屍と屍の間にあつて上から掩堡の碎けが覆ひかぶさつて居つた爲めについい氣もつかず引上げてしまつたのであらう、その後我軍にたすけられ唯今我國に歸り十分の治療を受ける身の上となつたが、よくろの當時を考ふれば夥多の戰友は一人も殘らず戰死をとげたその中に不思議に自分ひとり右の次第て助つた事は唯事てないと言ふて涙ながら語られた、傷も段々よくなる樣子てあるとの事、私は實にそれを聞いて非常に感じました、念佛者は無碍の一道なりと言ふ事がある、一度信仰を獲た上はたとひ肉がくだけるとも骨がれれるともその心の狀態は少しもかはらず、また何物もさはる事はないと言ふ意味の手紙を七月廿九日認めてこの人に出さうとしたその前日右の事があつたのであるから先日相逢ふたときも兩方更らに多言する事はない、かゝる事は信仰の上から見れば偶然とは思はれぬのであると言ふて兩方とも感謝の涙にむせんだ、私が此人の書いた手紙にも肉の生活を終へて靈の世界て逢ふかそれとも緣深くして再會する事か出來るか、唯偉大なる佛陀の力に安住すればそれ何れをとはぬのであると言ふた。然るに再びこの人と相逢ひ親しく手を握るなどは是まさに偉大なるものがあらはれて居る、偉大なる力にまもられて居るのである、人間の力はあうしてこうしてと思ふけれともその通りゆかぬものである、一輪の花洋々水のまにまに流されて、佛陀の力を得てやがて彼岸に到るのである。

一個人が種々苦悶して終に光を見る如く、社會そのものも終に光を認め來るのである。

廿六日（八月）の朝床の中で今度の戰爭について深く考へぬばすまぬと思ひ行くと、旅順を近き將來に陷し、遼陽より猶進み行く、一体如何になりゆくものかと考てると、唯領土の爭、償金の多寡、それ丈ては我同胞がかくの如く肉を飛ばし血を流し骨をくたく事はいらぬ、決してろんな小さいものゝ爲めにあらず、かくの如き血、かくの如き苦戰かくの如き決心は、まさにこれ人類の一大自覺すべき時の來れるに近づきたるものであらうか、啻に吾人日本人のみならず、かくの如く戰ひ爭ふは、やがて一大光明を認め來るその道行てはないか世界を擧げて、光明界中に進み行く一大過程てはないか、されば世を擧つて淸淨理想界に上る道程と見れば、今吾人國民は他の方面に武力を輝すのみならず、その最後に橫はる自覺を振ひ起すべきであると思ふ、戰爭のあるにつけて諸君と共に尊

き使命の下に各自覺して飽まで進みて失望せず、落膽せず、行き度いと思ひます。

＊　＊　＊　＊　＊

信念と修養

前田慧雲

◎學問の事では學者の後にも學者があるやうなもので、十人あれば十人その考を別にし說を異にするのであるが宗敎の事は誰が言はうと、何時說かうとも、その信奉して居る宗敎宗旨の違さへなくば、決して變ることはない、又變つてはならぬのである、こゝが學問研究と宗敎信心と根本的に違う所であるが、何れも相讓らさる立場を有するもので、これが若しも逆になつて來るならば、學問は腐儒に終り、宗敎は煩鎖哲學に墮落して仕舞のである。

◎讀んで見て合點がゆけば、學問上の知識では先づ滿足を爲るけれども、宗敎の事はそうはゆかぬ、何邊も讀て何度も聞き、考へたり工夫したりすることの必要がある、それ故學問は始終新しい知識を求めてあさると、宗敎は最も古い道理を堀り出し〳〵味ふのである、哲學の中には「信ぜられざる儘の知識」をも一の知識とするけれども、宗敎は「全く信ぜられたるこゝろ」のみを信念と爲るのである。

◎自分は永々の間學問をして來たが、今日では最早理屈に飽きたればにや、斯の知きことは聽き度くもなく又言ひ度くもない、結局人間の精神上の和平は親鸞上人の言葉通りに歸結するより外はあるまえを思ふ。

◎上人のその言葉には、

念佛して彌陀に助けられ參らずべしと、よき人の仰せを蒙りて信ずる外に仔細なきなり云々

とある、何の事はない、彌陀といふ法德に任かし上るの外なしといふのである。

◎彌陀の法德が自身の上にうつりたる有樣は念佛である。

◎また彌陀に助けさするところはその念佛の行者である、彌陀の法力にすつかり打任せて、その御慈悲を喜ぶ外に何の事もなきとの上人の御言葉は人心終局の和平を歌ふたものである。

◎今一層學問的に言ふて見れば、吾等の初中終相對（自他）の上に留まるこゝろをつきはなして、絕對（超自他）の上に自身を一致せしむること、これが終局である。

又之を道德的に言ふて言れば、善の惡のといふ差別想をば、之を如來絕對の界中に沒却して、そこから信念の安慰を獨得すること、これが終局である。

◎如來に御任せした後は、もう自身は從來の如き無籍者ではなく「佛の子」である、子となりたる上は親の德を身心の上にうつし致すことは明かなことであるから、念佛の行者は唯彌陀の法德を仰ぎ喜ぶより外ないのである。

◎報恩謝德の行といふことは、とりも直さず、その「喜ばるゝ儘の行」であつて、言ひ換ふれば「爲めにするこゝろのなき行」である、佛になり度いこゝろの先きに、佛にさして下さるとの旨を喜ぶの情禁し難きものがあるので、自らを忘

れて佛德を讃歎したてまつることは、少しも無理ではない有難いことである。

◎無爲の行即ち「爲すことのなき行」とは爲すべき筈の事にて、何の爲めにするといふことなき行で、謂はゞ本分の行を言ふのである、吾々の行爲が絕對の相をとるときは、こゝに至るのである。

◎吾々の心に自分勝手がなくなり、氣儘氣隨が亡びて仕まい、佛陀の光明を「拒む心」が消ゆると共に佛德身に着いて來る。

◎吾々の日々夜々に爲ること成すことが、皆んな自分の行であるとの自覺が、生ずれば難行も苦行も物の數かは、一生懸命になつて骨折らねばならぬやうになる、又骨折りを骨折りとも感ぜぬやうになる、吾々の稱名念佛は乃ちこの「骨折り」に外ならぬ、この骨折りをすれば、佛德身に浮んで來る、佛德が浮べはそれが身につく、そこで初めて信念と修德とが全くなるのであるが、佛德身につくやうに方便せるのは即ち念佛であるして見ると念佛は信念の初めから修養の終りまでを貫いて居ると言ふてもよいのである。

◎書經の言辭をかりて少し申して見やうなら、

人心これあやうく、道心これ微なり

これ正、これ一、まことにその中をとる、云々

とあるが、人心の軍勢は兵も力も大きいので、動もすると道心の牙城を攻め落さんとするのであるから、吾々はその戰鬪力の少ない方へと、援軍を送り遣らねばならぬ、援軍をやりて味方を救ひ〳〵するのは、乃ち一の骨折りである、この骨折りが即ち行でないか、これが修養であるのである。

かく見て來て、稱名念佛を比べて見るがよい。

念佛する度毎、道心首をもたぐる、道心の首をもたぐるのは、稱名念佛の援軍が來たので、道心か味方の牙城を振り返り〳〵するやうなもであるから、念佛は修養の好方便であることは明かなことである。心付いて見れば、道心の培養をすること、即ち修養の一事は中々容易のことでないけれども、佛德の不可思議功德は吾々の淺慮では及ばぬ所あり、念佛不退轉の月日を送る中には、心の雲消え、胸の曇はれて、身心二つながらゆたかなることを喜ばるゝに至るのである、如來の大悲仰ぐより外仕方かあらうか。

◎こゝでつまんで見れば、吾々が信念獲得の上には、何事も佛德の方に打まかせて置きながら、佛德を自身の側に現する爲めに修德をする、行がすゝめは信が增す、信がまして來ると行がすゝむ、信と行とは車の兩輪の如く、相並んで身心を益することは、最も明かなることである、故に平素宗敎的道心培養に力むるのは、最も必要の事である。

＊　＊　＊　＊　＊

記者曰く右は博士の所談の中から、うのはつきりしたる概念を把捉せむとつとめた故に、書き取つたことはまるで骨ばかりで、肉も血もないものとなつた、讀む人々の心してよ。

＊　＊　＊　＊　＊

信仰問題

一青年の信仰告白

謹啓

一介の精神病上り書生、四人の無病者に伴はれ、わが病院とも云ひつべき大澤の清穩の境を後に見て、やうやく昨宵天に明星を戴きて、浮世の風あらき杜陵故山に入りて候。

それより先つ日六日の事なりしか、行く手に光をみとめて、煩悶になやめるわれ、御地に趣く道々、ろく〳〵たる車上、ひとりまず〳〵波動を高めたりし、その耳目に映ずる秀麗の景みな悲しみの種となりたるに、不思議に候はずや、昨十日のかへり路のながめ、みな喜びの色をあらはし、行き交ふ人々も笑をふくみて見え候、先生願はくばしばらく余の告白をきゝて給ひかし、六日の事よ日高くなれる頃大澤の幽境に入りたりき、やがて法きゝたるその夕、われひとり岩頭高くたゝずめば、眼界の景何ぞ聖靈なるや、何ぞ壯嚴なるよ、靜かに眼をつぶれば、日暮しの聲、せみのなく音、嚠喨として樂を奏し、激湍岩にくだけて、天地の夢を永しへに破るやう、そこに破壞のひゞき、そこに妄却の色浮べり、我れ嚠喨の樂に迷ひ、破壞のひゞきに夢破れ、げに我れは夢現の中にさまよひて候へき。

時幾ばくか過しけるや、嚠喨の樂消え、そこにたゞ激湍我が夢を破りて、音永へ耳朶にひゞき、煩惱碎だけ、法の道深く、新しく作り枝路あへてなし、眼をひらけば、夜の幕すでに下りて、數寮の燈光かゞやきて、男女のさゞめき、我れにはみなすべて喜の音ときこゆるよ、何ぞかく人世たのしくなりしよ、何ぞかく戀しくなりしよ、有がたや佛陀の慈悲と思はずも叫び起き、八日の朝念佛なしつゝ法きかむとて出てぬ、そのとき我れなきぬ、涙を流しぬ、そは先生之人生の苦悶、さながら我身の上となり、思ひあたるふしかず〳〵、人の後にて思ふさまなきぬ。

わが父の如く親愛の先生、小生の苦悶をきゝたまひかし、想ひかへせばそれよ、去年の夏の事よ、時は夏の始めの事よ、われ父母に甲斐なきものよと思はれぬ、そは仔細あることにて侍り候なり、我が身弱くして常に病に苦めり、福岡中學校より盛岡中學校に轉校せしは、二年生の夏なりき、その時思ひぬ、わが身かく弱くてはとても學成し遂げらるまじとて、ひたすら運動に勉めぬ、そのかひありて二年生卒業より、三年の壹學期には、身强健の部類に入りて候、されど〳〵悲しからずや、成績中位に在り、福岡中學校にありては、未だ人後に立たざりしものをされどこは身の健全と取り交へたるものと思ひなぐさめたるもを、我が父母はあさましくも甲斐なき愚物と思はれぬ、馬鹿と罵りぬ、余その時うらめしと思ひぬ、かくて父母の愛は遠ざかり、淺くなりぬ、余世にもあられぬ思ひせり、これよりいたく仕事を言付かり、なく〳〵從がひてはたらきぬ、或は炊事より家の掃除、外用など、みな余の

持前となり終り侍りき、他人の境遇いかにと見れば、實に順境とも云ひつべし、我が家婢僕を仕へば仕はるべき家計なるに、何とて余を要するや、余には學問といふ大任あるに、父母の心余に艱難を見せしめんとてにや、嗚呼そは有難きことなれ、愛情なきは悲しき事の限りには侍る、わが父母兄弟すべて家庭睦ましからず、そこに愛といふもの、余が目にみとめ得ず、理想の家庭のぞむべからず、余書讀むを好めば購求したく思へど、父之を無用と罵りて許さず、曰くそれより金を求むるを心配せよ、財産大切なり、みだりなる費なり、他にその如く與ふる所があるかと、あさましき次第にて侍る、學校に行く時の樂しさよと今更のやうに感じぬ、そは父母の小言をきくことなければなり、されど家庭に望みなしとはいまだ思はざりけり、ひとり無念の涙をのみて、夏を過し、秋を經、冬に至りぬ、何か仕事中物品を破損する事あり、怒りて笞打ち、學校やめよ、馬糞さらひにも劣らずやなど罵られ、うらみ顏に出てたりとてまた笞打ちぬ、あはれ如何なればわが父母かく淺ましくなりつるや、その原因なども思ひ當れど更に父母の事多く云ふを欲せず、父と思ふ先生の事なれば是處までは御知らせ申なり、願はく他に云はるまじく候。

余は小川流れゆく木梢となり果てゝよるべきすがらみだになし、或時は最早堪えかねて父の意をあかしめて、手代なり家僕なりに遣られて廢學する方樂しからめと思ひ切ること度々なり、父も廢學さするは心ならず思ひるにや、余りに廢學せよとも曰はざれど小言はますます高まり、われのみに限らず、幼き兄弟も罵られ、弟妹の心從ひて感化せられてひがみて見ゐにけり、その時などはわれ身を以て父母に不心得にては候はずやとせまれば、空言のみ言ふ子よと罵られ、われ迄も笞打つことまゝなり、されど近所の人々あはれみて父母をとむるも度々よ、父母學問なければ衣服などは買ひ呉るれど余の望みと合はず、余は其樣なるものに要なきり、唯だ父母のやさしからむを望むにて侍る、冬も過ぎ春來りぬ、花ひらきぬ、人々浮れあそぶ、余は悲しみ多けれど、花を見れども花に色なし、何者か香をうばふ招魂社祭典の際なりしが余の衣服を買ひ與へられたり、余涙を抑へてその御心まことに有難けれど、私は衣服にありません、唯だやさしくして戴けばそれてかへて有難さがましますから、どうぞこれよりやさしくして戴きたうございますと願ひしに、かへつて怒にふれ申候ひ侍りき、余は僅かの暇あれば出てゝ北上の清流の岸に居て手に詩集をたづさへ讀んで樂しみとしける、何時も歸り來れば怒られたり、この春に家紺屋町に轉宅しけるより、北上川に遠くなりければ、常に二階の壹室にこもりけるに、大喝呼ばれて下り行けば何故にのみ居るぞ、何を勉强しつると罵り書を讀みつるにと云へば、書物等何でもよし下に居れと怒られ、下に居ても別段用もなきに時間は空費するの悲しさ、我が父の我が幼時の頃はやさしき人なりしに、何故にかく淺ましくのみ思はるゝぞと思へば、悲しさまして涙も出てさる程にて候、淺ましき哉と思へば、思へば思ふ程愛失せます遠ざかり行くは道を歩む如し、かくて家庭に樂しみを求め得ずかへる家庭をば早く去りたきは山々なれど、さりとてまた去るに忍びず、去らざればます〳〵親子の情失せゆく悲しさ

は。

他の家庭の團欒を見てはみな沈憂の思ひ、あまつさへ父母の爭ふ事などは實に見るに忍びず、止むるに力及ばず父落渡多き人なれば、日常母に曰はれ曰はるゝ程父の心急性になりゆくは目にあらはに見るごとく、母をいさむればかへつて惡しげに思はるゝ何ぞかく幸なき事に侍らむ。

三年級卒業の折成績よく出來て、生徒百餘名の中にて十八番の席を得たり、されど余には喜ばしからず、見すべき人、知らすべき人一人もなく、余は一位の人にも負げじと思ふところあれば、少しも余の悲しみてなぐさめ得ず、佛も他の人の如く專ら學問に志すならばと思ふにつけ、他の人のやうな母を得たく思ふに付け、父母をさまで思はざるに至りて候、かくて苦悶はその版域を廣めて候、そは余の一躍して中位より上位の方に登りしを同窓の諸友ねたみぬ、余運動廢してより（二年生の秋）理想高くなりしやうにて、つく〳〵中學生を見るに安逸に流れ、甘き家庭の夢をむさぼり、或は野卑に流れ、粗暴なると思ひて近くを欲せず、其等の人の顏をみれば氣に合はず、遂には家庭より受けたるひがみ根生出てたるにや、何人も氣に合はず、何う見ても人に涙なきやうに思はれ、人と話するを欲せず、ひとり書を讀むを樂しみ外出せず、友を訪問せず、友の力をかりず、かくして余は同窓の注目點となり、批評點となりぬ、されど余は耳目をかたむけざりき、嗚呼我れは家庭の樂しみなく、學校生活迄も面白くなくして遂に人生の問題にうつり、果取なきこの世、世は浮世なりと今更身にしみて生を持つて居ること甲斐なきものゝやうに解し、或時は苦悶に終らむより自ら死せんかとも思ひてはなし果てず、或は東都に上りて慈けある人に仕へて身を立てんかなど思ひ起し候へつることもかず〳〵に候へ得る、然るに幸なる哉松平先生の拙宅に御越しになつてから、少しく家庭の風波なぎてさゞなみ岸に打ち如くなりぬ、されど親子の愛は昔にかへらずと思ひ居り候、一夜父母弟妹の席にて先生より敎示をうけたり、大意は「自分の思ふ如く即理想通りに物を所置せんとする觀念ある如く他にもまたその念ありと」余此處にて一の生命を呼び返へしていと從順をもて父母弟妹にあたらんとせり、されど苦悶は醫するに足らざりき、余に一友あり苦悶中のうの慰籍はまた醫するに足らざりぎ、されど死なんとし或は父母を捨てんと思ひし事はそのためや思ひ止まりしなりき。

さてこの度の夏期修養會に松平先生に伴はれて大澤溫泉に參じ、佛陀の光、先生の慈悲によりて、人生の苦悶やいて將來の希望と化し、急に父母の戀しさまし早くゆきて孝養を盡さむものと殘惜しくは思ひ候へつれど、矢も楯もたまりかねて早々先生の手をはなれて故山にかへり候處、いとゞひたりしその社會、その家庭、いとゞ樂しきやうなる心地せられ候、家に入るや父のとがむるその言今は有難いやうな心地し歸れる次第をはなし、母の外出してありければ歸宅をまちて今までの罪を謝し以後何と御叱り遊はすともゆめ〳〵うらむまじくと余のかくごを涙ながら話しを致し候へ侍る、

明朝になりてまめまめしくはたらき、はたらかふと思はずと何となく獨りて手動くやうになり、月すみて親しく溫泉の話をするに和氣藹然たるを覺え、始めて家庭の樂出て來り候、以後は深く佛を信じ、昔の事は皆余の惡しきところの致すところと思ひ、煩惱に打ちかち燒いて光となすべく、ひとへに往生極樂のみちを修むべく候、修養足りなき小生の事にて候へば、苦悶に落入るべきは必定に有之候へば、その時は細々と先生に書きて上げ候故、何卒御手を引あひ被下度念佛申上げ候、たとひ先生にすかされまいらせて、念佛して地獄におちたりともさらに後悔すべからず候。

戀しさや光を得ての浮世かな

求道の子　靜江壹郎

味ひて始めて知る眞鹽哉

さゞめける下界の人なかへりみて

＊　＊　＊　＊　＊　＊

獄中の人に與ふる書

近角先生

謹啓仕候。陳者未だ御面謁を得ずして唐突にて書面を以て御伺申候厚顏慚愧の至りに御座候得共。佛陀御慈悲之御指導によるものと思量致し、御迷惑をも顧みず、自身の罪惡を懺悔し佛陀の敎理研究中偶疑の點御敎訓を得度、何卒御高驗を得ば幸甚之至りに御座候。

自分儀永らく稅界へ奉職致居候處、煩惱に侵され、惡覺の注入する處と相成、遂に岐路に踏迷ひ監守盜罪を以て、御審理の末輕懲役六年の御判決を受け（是等は凡て全然宗敎を無視せしに基因せしものと思量仕候）當時呻吟苦惱且つ社會善良なる同胞の壓かより國家の寄生蟲同樣の身分に有之、之れ等は既に神佛に見捨てられたるものと失望落膽致し居候處。研究以來御敎諭を聽聞するに佛陀大慈には趣味深遠廣大にして其妙味なる事を自覺致し、如何にもして此時機を失せず●佛陀の眞理を究め、佛の救濟力によりて再び社會の良民と相成度精神にて、敎誨師大石直見殿に御面謁を願上其敎理は如何なるものなるかを伺上候處、懇篤なる御敎誨凡て佛陀の御慈愛は假令一度國家の罪惡を犯し、縲絏の苦痛を受け呻吟苦悶中と雖も、先非を悔悟し懺悔せし事ならば佛陀の救濟力に預り、必ず甘露の法雨に沐浴する事鏡臺に向ふが如くなるにより、益々獄則を謹守し、役業に勉勵し且つ精神の修養を怠らず致すべしとの御敎訓より。翻來眞宗勤行集より初學仕居候處、去る七月に至り尙佛書購求の件に付伺上候所佛敎界にて歡迎せらるゝ書籍は信仰問題なりとの御話に基き購求數讀仕候處、實に佛陀無限の慈光は迷蒙を破りて呻吟苦惱（妻子五人有之自分の犯せし罪惡の爲め妻子を臥薪嘗膽の思をなさしむる事を日夜考思安眠する事能はず）する精神の苦悶を除去致し候。之れ等は凡て佛陀の御示導により其無限の救濟力が頭上に降れる事を覺醒致し候。殊に修養論を數讀仕候に實に明晰にして暗黑中より日光を眼視せしが如くにして、罪惡の爲め悲境に陷り呻吟苦惱中には御座候得共、實に不幸中に信仰を磨くべき砥石に見當り、正に佛陀の信念を我が胞中に注入する機會を神佛より惠與せられたるものと專心決意致し。益々正路に進行、何卒して佛陀大悲の御慈悲に預り惠典に浴し度き精意にて、念佛を唱へつゝ安慰平安なる事を朝夕祈り居申候。如何せんまだ信仰の薄弱なる爲めか、信仰論を拜讀仕候に御說明晰にして頭腦を貫通致し候も「吾人は何そや佛陀は何ぞや」にて矢張り惑疑者の一人に有之候に付、何卒如來の實在を確め度誠意に御座候御繁多に御座候得共、左の件御敎訓を得度候。

（一）如來の實在、

（二）圓圓に呻吟苦惱するは肉體と精神と共に苦痛を受け居るものに候哉

追願甚だ汗顏の次第には候得共、何書籍にてもよろしく候間御手許にある書籍一部御惠送被下度、實に今日の不自由なる境遇御思慮被下度候甚だ失敬には御座候得共御返信料として郵券二枚封入仕候也

札幌字扇ヶ池　吉田平次郎拜

近角常觀樣

拜啓貴書正に落掌仕候。忙手拜見仕候處、何事も明瞭に御告白甚だ懐かしく奉存候、特に大石君之御導きによりて拙著御覧被成下、非常之御苦悶中大安慰を得玉ひし由、是偏に如來直接之御催しによりて御安心なされ候御事と存候。是實に信仰論中にある、阿闍世王が月愛三昧之光によりて身体之苦しみを脱かれしと御同樣と存じ候。啻に身体のみならず、心の苦しみをも脱せられたる御事と存じ。私も非常に苦悶に陷り身体上に非常の傷みを感じ、切開治療の上病氣之本復と同時に精神上にも安慰を得申候。其事は前冊「信仰の餘瀝」之序文に記載致し。其時の安心して御佛の光を仰ぎたる心持は同書第一章「宗教的同朋」との下にあらはし申候。ヨク〳〵御熟讀被下度候。依是不肖は身体の病氣の癒へしも、心の安らかになりしも、皆御佛之力と深く信じ申候。カク御佛の味を味ひたるが即ち佛の實在が分りたる次第に候。如來之實在とて其外に六ケ敷理窟て證明する事の出來るものには無之候。信仰之餘瀝「聲をきくべし光を見るべし」の章の終にある如く、物を見た聞きたと云ふに理窟なき如く御佛を味へばたしかに御佛の在す事は疑はむと欲して疑ふあたはず、信ぜざらむと欲して信ぜざる能はざる次第に候。夫故私は實驗の宗教と申次第に候。御來書に獄中に呻吟苦惱中慈光を蒙りて苦を除去し得たりとの御話、實に〳〵私はアリ〳〵と御佛を拜み奉る心地致し候。大無量壽經に曰く。

若し三塗勤苦之處にありて此光明を見奉れば、皆休息する事を得亦苦惱なけむ。

貴氏は此境を實驗し玉ひしにあらずや、是如來の實在か分かりたる御事と存候。

次に獄中は身心の苦惱がとの御尋ね、是は御尋ねなくとも既に御自身に御告白ある通り身心の御苦と存候。即ち安眠する事も出來ず、又色々と苦悶し玉ひし事實によりて明瞭と存し。而して佛陀の御光は此身心の苦を脱せしめ、安慰を與へ玉ふ次第に候。抑々佛陀の慈悲の光は千古輝き玉ふと雖之を受くる事は極めてあり難し。釋尊の時に於て初めて之を實驗せられしは何處にて何時なりしか御存知なるか。

即王舍城の阿闍世王ありて父を殺し母を獄に幽閉せし時、母韋提希夫人獄中に呻吟苦惱して遂に釋尊に請ふて目連阿難を遣はして慰問せられん事を請ひし時、釋尊自ら行き玉ふ。夫人悲泣雨涙して五体を地に投して哀を求め、懺悔して苦惱なき所に往生せむことを願ふ。此時佛初めて阿彌陀佛の慈悲を說き玉ひし也。佛韋提希に告玉はく、汝今知るや否や阿彌陀佛此を去ること遠からずと。嗚呼此一言を味ひ玉ふべし。佛は獄中に顯はれ玉ふなり「煩惱にまなこさへられて、攝取に光明見ざれども、大悲ものうき事なくて、常に我身を照すなり」吉田君味ふべきは千古變りなき此御光にあらずや。韋提希を照し玉ひし光は御身や我等を照し玉ふ御光にあらずや。世間は此我を捨て去るも我に對して親しき同心の友として同情の慈悲を運び玉ふは御佛にあらずや。（參考求道第七號興軍人書第三）此事は觀無量壽經にあり。而して其惡人たる阿闍世王が過去の罪惡を感じて懺悔し、遂に佛の救にあづかる事は涅槃經に出てたり。之を「信仰問題」信仰論中に明記致候彼阿闍世王の苦悶を見れば他人の事とは思はれず、私自身の苦悶と同樣と頂き申候。さ

れど佛陀は「汝若し罪あらば諸佛も罪あり、汝若し地獄に墮つるならば諸佛も共に墮獄すべし」との慈悲を垂れ玉ふ。カク承れば獄中身心の苦あるも、韋提希夫人が廓然大悟の安慰の境を得たると同等の境に入るゝ事と信じ申候。依之たとひ身は獄中にあり、心はたとひ煩惱の雲に蔽はるゝ事あるも、全く佛陀攝取の光明の中にありて身も心も自由の境に遊び申候。（信仰の餘瀝第八章）「信界に於ける監獄」といふ章を御熟讀被下度候。若し佛の光に遇はざるものは獄に入らずとも信仰上より見れば獄中に在り、佛の光に遇へるものは、たとひ身は獄中につながるゝも身も心も自由にして淨土に遊び佛に交り奉る。「超世の悲願きゝしより、我等は生死の凡夫かは、有漏の穢身は變らねど、心は淨土に棲み遊ぶ」といふ親鸞聖人の嘆咏有之候。

現に教科書事件の時「信仰の餘瀝」によりて大なる信仰を得たる法學士野田藤馬氏幷に其同室にありし人は皆獄中にて大に喜び無罪の事明瞭し、出獄の時は身量を加へたりし程に候。唯々過去の罪惡は皆佛陀に懺悔して御慈悲を喜び玉ふ事何より肝要と存候。信仰の餘瀝御味ひ被下度差上申候。又「嘆異鈔」は親鸞聖人の信仰の極處を描かれたる廣大なる聖教に候。嗚呼佛陀の慈悲は大海の如し、大海は水の清濁を問はず、清流の來るが爲めに清を加へず。濁流來るが爲に濁を加へず。吾人の佛陀の慈悲海に向へば罪惡も闇黑も亦一時に滅し玉ふ次第に候。さればこそ無碍の一道と仰せられ候次第に候。

返すゝも御佛の力に任せ結果の如何をかへり見ず、過去の惡しき事は心中深く佛陀に懺悔して何等の計ひもなく、只感謝の生活をなし玉ふべし。我計ひはなくも、自然法爾の御力によりて、必ず〳〵不思議の御護を受くる事必要と存候。これは不肖實際人生上に實驗し來りたる事實に候。即ち「我此利を見るが故に此言を說く」とたしかに斷言するを憚からざる次第に候。他は必ず御思ひ當り玉ふ事あるべしと確信仕候。嘆異鈔も差上候間御熟讀被下度奉切望候「求道」は二號以下皆そろひ居申候。御不審の事あらば大石君は不肖の事よく御存知なれば色々御尋ねあるべく候。又不肖よりも一寸申上候。私は此書が貴氏の上に大なる安慰を與へ玉ふ御導きとなる事と信じ申候。何となれば是皆私の申す事にあらず、皆如來の御心を申上候へば也。只々阿彌陀佛此を去る遠からず、との佛の御言を頂き下され度候。頓首

九月十二日雨窓燈下

吉田平次郎樣

獄窓を打つ雨の聲の間にも、御佛の御唱聲を心に味ひ被下度候「闇の夜に鳴かむ烏の聲きけば父かとぞ思ふ母かとぞ思ふ」

＊　＊　＊　＊　＊　＊

出征軍人よりの返書

一

恭しく一書拜呈仕候。時下、はつ秋梧桐一葉風にひるがへるの候、益々御清康道のため奉賀候。その後度々御音づれ申しあぐべき處、軍務に追はれて遂にはたさず、失禮の段奉謝候。さて御惠贈の求道ならびに嘆異鈔、戰地よりめぐり〳〵て唯今たしかに拜受仕候。ことに二種郵便にて多大の御費用を出さ

せられ此の一兵卒に眞理のめぐみをたれられむとは洵に感泣の外なく何とも申あくることば無之候。小子六月下旬より疾にかゝり療養そのしるなく、遂に去月廿三日病院船にて送還直に本院に入候。歸國以來日に快方に向ひ候へども、なほ當分本院にをるべく歸京は十月中旬と存じ候。目下病床徒然種々の煩悶になやまさる折柄この御賜に接し疾もほと〳〵癒ゆる心地いたし候。自今熟讀病中の光明といたす覺悟に候。決して一二度卒讀して御厚志にそむくが如きといたすまじく候。種々申しあげたきも病中意の如くならず候間、こゝに筆をとめ候。まことに〳〵嬉しくて筆にては到底申しかね候恐々

廣島にて

九月八日　　塚本松之助

近角常觀先生侍史

二

謹啓。陳者尊師愈御清福奉賀候。扨求道引續き御惠送被下感謝以て筆紙難盡候。殊に第七號には尊師か愚生に對する御厚情の最も溫く溢れたる薫墨の載られてあるあり。冊頭より讀來り讀了り、冊爰に竭き只感泣仕候。如仰最近激戰に於ては色々壯烈悲慘なる事實を目睹致し、色々の感想に打たれて色々の信仰問題を自解し得たりと存する所も有之候。就中、最も妙味を相感候は、我軍人多は――中には所謂無宗教と自ら唱ふる者あるも――確に一種動す可らさる信仰を有する者なりと認めたる事に御座候。殘忍極めなき海戰の負傷者にして、片脚を失ふて、尚ほ闘はんとする、死に瀕して自若たる、確に信仰の有る者に非すしては不叶と存候。是れ我海軍へは豫て貴宗より屢々高僧を派せられ說道に勗められたるの効も與て大に力ありと愚信仕候。從て今後も此の如き田地へは益々佛光の鋤を加えられんこと最も必要にして、而も易しと相感申候左に右く愚生は良き實驗を致し、且つ引續き無事勤務罷在候程に、萬一生還の日もあらは尙詳く壇下に御物語仕る機も有らむかと存し居候。頃日本艦は依然として○○に遊戈し敵艦隊の○を○○つゝあり。敵若し正々堂々の砲火を放たんと欲せは、再度の激戰は近き將來に之を見るを得べし。其節は再實驗を爲し得ることと日夜穹窿を仰き波濤を望み待ち詫ひ申居候。先は不取敢御禮旁近狀御報迄如此御座候。頓首

九月十一日　　軍艦○○にて　　篠田重弋

近角尊師　堂下

追白求道は皆々に慶く閲覽に供へ居候間、佛陀の光明は不知不識の間に甲鐵にも滲み込み候事と存候。
又豫て求道會館御設立の趣意に感し賛同の意を表度存居候。

三

拜啓昨日は此一兵卒を態々遠路御厭ひなく御訪問に預り奉拜謝候。其節御懇切なる如來の大法鼓御惠み被下難有拜藏仕候。孜々拜讀唯々感佩の外無之候。其節種々御尋ねに預り候へ共、如何せん胸塞り何とも御答に躊躇仕候。

入營當時熟考するに此度は邦家非常の難局にて、出征の途に就く上は到底生還の程測るべからず、我信仰は如何我は果して如來の救濟に安心し居るかと自己反省の念頻りにして、心靈上の爭鬪止む事なく、其節佐崎氏及び友人より求道、精神界御惠送被下、殊に佐崎氏よりは書面にて御教導被下候事に候得共。暗に迷ふもの、益々迷ひゆく譬の如く、煩悶の敵に襲はれ、爲めに重ねて先生に愚書を呈し、御配慮を蒙りし次第に候。

渡清以來、回想すれば連山巍峨として雲際に聳え、嚴石重々として容易に歩を進むべからず。敵は此天險によりて防禦を施し、終始我が防禦地に向つて頑固に抵抗し、其聲轟然天に奮ひ榴散彈の破片は雨の如く飛散す。余は毎日此無常の風吹き荒むに當り、益々大靈の御救ひ近きに接するの感致し候。七月○○○には愈〻○○○の攻擊命令と相成、午前四時出發靜肅なる行進を致し候。天明けずして彼我の砲火既に熾にして悲慘の狀況目前に現出致候。銃丸雨下し來りて斃るゝもの多く、余は一心に佛名を念し、彈丸雨中の間と雖も、余一人の行進にあらず、御佛の冥護に預り居るなりと、勇奮進擊す。益々突擊して止まず、敵陣に近接するに及むて、敵は猛烈なる機關砲を以て瞰射す、死傷無數、遂に不肖も銃丸貫通して斃れ、少しも動く能はず、左右を顧みれば戰友の斃れたる狀、たゞ慘憺たる光景と申より外無之候。過日御來駕之節御話申上候通り、當夜敵の逆襲に遇ひ負傷後打斃れ呻吟しつゝあり我同胞をば無慘にも逆殺し、悲鳴の聲を耳にする毎に寸斷せらるゝの思ひをなし、實に慘絶悽絶の極みに候。我運命は極まれり、我の呼吸は今幾秒時ぞ、我は俎上の魚なり。彼を思ひ此を考へ紛々たり、擾々たりき。何事も如來の御計ひにまかす外無之候。這般生死の間髮に於て一際如來の御救ひを賴母しく思ひ候。嗚呼幾多の顧慮も、幾多の苦悶も全く思ひ斷ちて如來の御許に至らむ事を從容待ち居候處、敵に發見せられず不思議にも九死の中に一生を得て野戰病院に收容せられ候。且つ御懇情の御書面を拜するの幸を得て、實に尊き如來の御賜と難有拜藏致候。敬白

九月十日　　澁谷にて　　北條幸作

近角常觀殿

四

謹啓、

過日の御手紙難有拜讀仕候。昔に變らぬ御情深き御辭一々身にしみて覺ゑず落涙仕り繰り返し拜誦致候。誠に仰の如く御別れ申してより長き年月を送り候間にたま〳〵兵學校の夏休み等にも御尋ね申上し事も有之候得共、折あしく何時も大人御不在にて拜顏を得ず、誠に御疎遠に打過居候得共、兄弟共先生の御容子何時も思ひ起し常に近角さん〳〵と申候はよく〳〵御緣のつきぬ事と存じ居候。扨小生今回遠洋航海も致さず、直に本艦に乘込み出征以來、他の艦隊や、陸軍にては續いて花々しき戰も致候に、獨り或任務に服し戰爭に加はり居るや、居らぬやら一向知らぬ位に有之、而も其困難は却て他に幾倍致候。世間の知り合に對し面目なき心地致候得共、かゝる任務を果すものありて始めて他も榮ゆ可申、大體より云へば少しも耻づる所なし。大君の爲め盡くす點に於て他に優るとも劣ることなしと自ら慰め居候。而し時々愚痴を起し申候、不圖むかしの靜觀錄の事を思ひ出し、如何にも讀まずに居られぬやうな心地致し、遂に御手數相かけ候樣なる次第に有之候。

早速御厚情を以て種々難有御本御送り被下何とも御禮申上様無之候。以來閑暇ある毎に拜讀し、少しつゝ相得る處有之候心地致候、又折々は幼少の時よりの事杯も思ひ當る節も澤山有之候。尚以後とも充分修養相勵み可申候。先は御禮旁々如此御座候。再拜

九月七日　近角先生

軍艦〇〇にて　太田文次

同一鹹味

死するにあらず、生るゝ也

百目木劍虹

死は暗黑を意味すると共に絶望を意味するものである。死の聲一たびいたれば萬事休すとは萬人の口より發する、所謂絶望の長息たらざるはない。人生忽爾として死の淵に臨まむか、權勢も恃むに足らず、名譽も償ふに足らず、財産も要にあらず、父母と雖、妻子と雖、賴るべからず。乃ち死の前には王者もない、沙門もない、富者もない、乞食もない、華族もない、平民もない。釋迦もないと共に基督もない。死は平等也。絶對的平等也。

死は悲みによりて免るゝものでもない、喜べばとて心のまゝなるものでもない。壯年を問はず、老年を論ぜず、其紅顏と白髮たるに拘らず、黑き死の幕は時と處とを選ばず、絶えず吾人々生を襲ひ來りて千仞の谿谷に打ち落すのである。力ありとて之に抗すべからず、望みありとて防くべからざるは實に死の關門である。死の前には勇者もない、弱者もない、賢者もない、愚者もない。死は無上の命令者也。既に我等の背後には一個の墓標が打ち建てられつゝあるのである。水の流れの止む時あるとも死は遂に免るべからず。これ自明の理、疑を容るべき餘地がない。されど千古永遠の問題として今尚人心の奥底に潛みて解かむとして解くこと能はざるは死の問題である。死の來るや一呼吸の間にありと雖、死は我等の約束也。死は我等の約束なればとて徒に死を急くべきではない、未た死の運命いたらずして屢々死を思ふて止まぬ事あり。而して死すべくして死せず、生くべくして死する事がある。死は不可思議也。げに測るべからざるは死の問題である。

倩々思ふに人は常に運命の手によりて支配さるゝを免れぬ。自ら幸福ならむと豫期したりし事の却て不幸に陷る事は曾て經驗の敎うる所、不幸屢〻來りて厭世の念愈〻起り、遂に世をはかなむに至るは免るべからざる事實である。悲觀し來りて頭を回らせば、春風洋々の樂事も遂に秋氣蕭條の悲哀とならざるものはない。古の人は消極的に快樂を避くべし、然るときは快樂隨ひ來らむと、敎え導きぬ。これ一面には人生の悲哀多くして觀樂少なきを歌へるもの、人生の前途亦憫むべきである。されどショッペンハウエルの云ひし如く中の人には荒蕪淺薄なれども、乙の人には富裕、趣味なりと、甲乙の二者同しく人類なり。境遇の異るによりて一方は至樂の境にあり、一方は悲觀の淵に沈むのである。屢〻死を思ふの人多くは後者にあり、所謂幸と云ひ、不幸と云ひ、樂境と云ひ、悲觀と云ふも畢竟五十年間の相對的差別に過ぎぬ。若し吾人が最後に於ける死の岸頭より之を望むときは、非人も、王者も、將た幸不幸の人あるなく、等しく人類あるのみ。何人も早晩一度は死の關門に跪かねばならぬ。

而して世に死を怖るゝものあり、これ王者に多し、婦人に多し、安逸を望む人に多し、幸福を希ふものに多し。其怖るゝ所以のもの位置を失はむが爲め、名譽を失はむが爲め、愛に別れむが爲め、而して財に別れむとを惜むは云ふまでもない。

而してまた死を願ふものあり、これ絶望者に多し、煩悶者に多し、不幸の人に多し。之を願ふ所以のもの、人生の事意の如くならず、前途光明のかゝやくなく、四邊暗黑に包まれ進退維れ谷るに於て、始めて死を決し所謂死によりて現世の苦痛を脱却せむとするもの、是である。死を怖るゝは現世を棄てかたき人也。婆戀しき人也。死を願ふは世に容れられざるが爲め也。乃ち現世を見離したる人である。世に容れられずして死を願ふもの果して悟れるか。婆婆戀しき人果して迷へるか。

死は易く生は難しと云ふ。たゞ死によりて百千の苦惱除かるゝとせば、何人も從容死に就くを願はぬものはない。精神的苦惱は肉体の死によりて解決せらるゝものではない、死は遂に死に止まるのみ。而して精神的苦惱は永遠に存續するのである。死は單に肉の消滅を意味するのみ。何ぞ精神的苦惱を除くと云ふ得るや、死果して悟るれか、生迷へるにや。たゞ愛に溺れ、財に耽り、利に奔るの生ならば生や全く人生の意義を沒却せるもの、寧ろ死にだも如かざるのである。死は易く生は難しとの語は、如何にして死すべきかよりは、如何にして生を全くすべきかと云ふ問題に歸着するのである。若し生をして意味あらしめ、生を全くするを得て始めて死に就くを得ば、ソクラテスの如く毒を仰いで死すとも少しも遺憾なる事はない。彼は啼泣慟哭する門弟に向て靜に敎訓を垂れて曰く。「人は神意に從ひて靜肅に死すべきことを悲むなかれ」と。我等は死するも、生くるも如來の御計ひに任すのみ。死生の問題はたゞ佛陀の御手にあるのみ。

壽長ければ耻多しといふ。人生の凡て爲すべき事をなし、凡て行ふべき事を行ひ盡すを得ば何ぞ命壽の長きを憂ふるに足らむ。爲すべき事をなさず、行ふべき事を行はず、徒に生を貪るが如きはこれ耻づべきの次第である。一個の卑諺人生の意義を解し得て妙味甚だ深きを覺ゆるのである。

若し身を殺して仁を爲すの人あらば、これ千古永遠不死の死也。死の星や長へに輝やくのである。若しそれ朝に道を聞いて夕に死する人あらば、其人や死するにあらずして、玲瓏たる玉の如き清淨安樂國に生るゝのである。かくて死の意義は明了になるのである。

死は平等也。人は遂に一度は墓に入らねばならぬ約束を有す、約束は承諾也。今更ら怖るべきではない。死を怖るゝは

約束を忘れたる人、乃ち死の何たるを自覺せざるのである。眞に死を喜ぶの人あらば、そは道に入りし人也。道とは何ぞ、佛の道也。佛の道は信ずるにあり、確に信ずることによりて生死の問題は自得せらるゝのである。かゝる人こそ實は死するにあらずして生るゝのである。

經に曰く。願生彼國。

＊　＊　＊　＊　＊

有絃無絃

無絃生

警笛一聲

圖山隧道、警笛一聲、瀛車突爾として止まる。車掌疾呼す、機關に異常を生ぜりと。頃刻にして、煤煙室に滿ち、電燈朦朧たり。乘客雙語を發せず、唯々次取咳嗽の次第に多きを加ふるあるのみ。此の如きもの約八九分にして再び運轉を初め、隧道を出るを待て窓を開き、滿室一齊に一種の吐息をつけり。何れも再生の思をなせしが如し。是れ予が客月歸省途上に遭遇せし所の椿事。

人は此の如き場合に於て、初めて眞の自己を瞥見するとを學ぶ。眞の自己を知らざるもの、人生の不幸焉より大なるはなし。吾人は日常、可成的種々の機會を利用して、可成的屢々眞の自己に邂逅せんとを勉めさるべからず。

菜根譚に

驚花茂而山濃谷艶、總是乾坤之幻境。水木落而石瘦艇枯、幾見=天地之眞吾=。

といひ、又

聽=靜夜之鐘聲=、喚=醒夢中之夢=。觀=澄潭之月影=、窺=見身外之身=。

といへるもの、また此間の消息を洩すものと謂ふべき也。

飛蛾鴟鴞

斯くて吾人は眞の吾人自己に邂逅すると同時に、吾人は又彼が吾人にさゝやく所のものに耳を傾けざるべからず。予は還初道人の言を通して、吾人眞吾の痛快なる一警告を聞けり。彼曰はく

晴空朗月、何天不=可=翔翔=、而飛蛾獨投=夜燭=。清泉綠卉、何物不=可=飲啄=、而鴟鴞偏嗜=腐鼠=。噫、世之不=爲=飛蛾鴟鴞者=、幾何人哉。

武樂院

百濟河成畫を以て聲名一時に鳴る、飛彈內匠また同時代の人にして絕代の工匠と稱せらる。或時內匠河成と技を鬪はしめんと欲し、一小堂を作りて武樂院といふ。構造頗る精妙を極む。河成に告げて曰く、予既に一間四面の堂を作る、敢て臨觀を煩はし且つ壁面に妙筆を揮はれんとを乞ふと。河成招に應じて之を見れば、矮小の堂宇にして四戶悉く開きたり。即ち南方より入らんとすれば其戶忽ち自ら閉づ、又廻て西よりすれば西戶また閉ぢ南戶は戛然として自ら開けたり、北廻東旋四方を徘徊して入らむとすれども戶扉自ら閉開して遂に入るとを得ず、內匠側に立て大に笑ふ。（後河成內匠を請じ、死屍の壁畫を以て復仇せり）と、是れ古來美術家逸話の白眉と

して人口に鱠炙する所。予は人生諸般の事項に於て必ず武樂院的現象あるを見る。

宗教も亦一武樂院にあらざるなき乎。吾人卒爾として佛敎の殿堂を望むや、八万四千の門戶悉く開かれ、那方よりするも堂奧に達せられざるなきがごとし。然れども一たび步を進めて禪の一門より入らむと試むるや、不立文字の門戶忽ちに鎖さる。又步を廻らして念佛の一門より入らむとすれば、難信之法の門戶また閉ざゝる。或は律に廻ぐり密に旋ぐり、乃至或は儒に往き基に轉じ、方々面々を徘徊して入らむと試むるも、當面の門戶至る所に閉ざゝれて遂に入るを得ず。是れ方に現代多數求道者が經驗しつゝある所の現象にあらずや。武樂院に入らむと欲するものは任意一面の戶扉を蹴破して進むべきあるのみ。宗敎の堂奧に達せんと欲するものは有緣の一門に直往突擊して、之に入らずんば止まざる底の勇猛精進を要す。此の覺悟なきものゝ前には、門戶として閉ぢられざるなく、此の覺悟あるものゝ前には、門戶として開かれざるなし。求道の要義は唯々眞面目に叩くあるのみ。一度叩きて開かれずんば二度叩け、二度叩きて開かれずんば三度叩け、四度五度乃至百度、叩き叩いて止まざれば必ず開かれむ。否、佛陀は常に救濟の門戶を開き、大悲の御手を擧げ、今も吾人を招きつゝ立ち給ふにあらずや。

濁水、清水、

谷文晁性傲放にして甚だ酒を嗜む、酒盞常に其の側を離れず。或時一人の書生あり、自畫の山水一葉を示し以て批評を求む。文晁之を一瞥せしのみにして言なく、更に酒を酌て滿飲數杯す。偶々過て酒を席上に覆したるが、忽ち其の山水の圖を取て之を拭へり。門人之を止めむとして及ばず。書生甚だ怒て之を詰る、文晁答て曰く、汝の畫は無益の畫なり、此の如き拙劣の畫を以て人に誇らむとするが故に我れ之を拭巾に代へたるのみと。山て諄々乎として具さに畫法を說く。書生大に其敎に服し、之れより贄を執て其門に入れりと。

明治の文壇に一異彩を放ち、今は無き數に入れる小說家某山人の未だ年少かりし頃、其得意の作を携て某先輩に益を請ひし時、某先輩曾て一字を添刪せず、常に曰く、更に他の作を持來れと、此の如きもの幾回なるを知らず。山人意甚だ平ならず、一日暗に洩らす所あり、此に於て某先輩徐に口を開て曰く、予豈に添刪の勞を吝まんや、然れども予は添刪の毫も子を益する所以のものにあらざるを知る。予が子に求むるに常に他の作を以てせし所以のものは、由て以て子が想泉のうは水を汲出さしめむが爲なりき、新泉の清澄を望むものは先づ頻に其の濁水を汲み捨てざるべからず、斯くて初めて芳冽の清水は得られむのみと。山人大に悟る所あり精勵十年遂に盛名を一代に擅にするに至れりと。

文晁が一書生の畫を以て席を拭ひたると、山人の先輩が一字の添刪を爲さずして更に他の作を求めたると、露骨婉曲方法同じからずといへども古今名家の育英、自ら異工同曲の趣致あるを看取すべし。而して予は後者の特に適切にして意味深長なるに服す。

夫れ宗敎は口のことにあらず身のことなり、身のことにあらず心のことなり。然らば信念の修養に關して、該論は全然

無用のものなる乎、何ぞ其れ然らん。古德語あり心得たと思ふは心得ぬなり、心得ぬとも思ふは心得たるなり。

と。されは吾人道を求むるものは屢々所信所感を先覺同朋の前に披陳して、我が心得たりと思ふ所の却て未だ心得ざるにあらざるなき乎を吟味せざるべからず。是れやがて、心泉のうは水を汲捨て、清淨の信水を湛へしむへき好箇の手段ともなりぬべきなり。若夫れ清淨の信水の湛へられたる靈泉には、花映じ月映じ樓臺映じ。詩なき能はず文なき能はず談話なき能はず。而も言々句々、餘韻嫋々、趣味津々として、長へに盡きざるものあらむ。

蓮如上人御一代記聞書に

蓮如上人仰られ候、世間佛法共に人はかろ〳〵としたるが善きと仰せられ候。嘿したるものを御嫌ひ候、物を申さぬが惡ろきと仰せられ候。

或は講演か又は佛法の讃嘆などいふ時、一向に物を言はざること大なる違なり。佛法讃嘆とあらむ時は、如何にも心中を殘さず相互に信不信の儀談合あるべき也。佛法談合の時物を申さぬは信の無き故なり。

新茶

一村翁手製の新茶を贈り且つ云ふ、今年のは例年よりは薫薄しと。予其故を問へは、翁答へて云ふ、茶の芽出し前に雨多ければ其年の茶は必ずかをり薄し、思ふに葉開きの容易なるが爲ならむと。俚諺に若い時の苦勞は買ふてゞもせよといひ、古語に艱難玉汝といへるもの、蓋し自然人事を一貫せる鐵律なり。

萩、桔梗、

萩なり桔梗なり女郎花なりの兩三枝を手折りて瓶に挿したるを見て、其風姿を評騰せんと欲するものは、美人の明眸を抉ぐり取り皓齒を拔き取りて、其趣致を品評せんと欲するものと何の撰ぶ所ぞ。嬋媚たる紅顏の表に適當の位置を占むる所に於てこそ明眸も明眸なれ皓齒も皓齒なれ。金風動き玉露凝り、顥氣流れむと欲する秋の野の千草の中に立ち交りてこそ萩も萩なれ女郎花も女郎花なれ。美は全局の大觀に在り。

牛の理想

柳居の句に

喰ふかと牛は見てゐる萩の花

然り、牛の理想は此の如きのみ。

兒供の理想

兒供は、叔母の來りて長く滯在せんよりは、屢々去々來々せんとを好む。蓋し彼等は之れに由りて屢々土産を得んとを欲すればなり。兒供の理想は唯々此の如きのみ。

* * * * * *

南村閑話

一記者

◉書は心畫也。

◉精進も持戒の一也。

◉肉食妻帶は決して本旨ではない、彌陀の本願を信ずるが

主眼である。

◉行誡上人が獨園禪師に痛たく感心して居られた事がある。それはこうである。明治の初年頃各宗相寄りて佛敎の講演を開いた時、般若心經は各宗に通ずるから之を講釋した方がよからふとの事に略ぼ一決せんとした。然るに獨園禪師毅然として肯ぜず。今や僧風次第に衰へぬ。之を矯正するには是非戒律によらねばならぬ。即ち戒律の經文を講ずるを可なりと主張せられ、遂に梵網經を講ずる事となり、而して行誡上人之を講述せられた。これが行誡上人が獨園禪師に感心せられし次第である。此時の梵網經の講義の本が殘りて居る。

◉梵網經瞋打報仇戒に曰く。

瞋を以て瞋に報ぬ、打を以て打に報ゆることを得ざれ、若し父母、兄弟、六親殺さるゝと雖、報復を加ふるを得ず、若し國主他人の爲めに殺さるゝと雖、復た報ゆるを得ず。生を殺して生に報ゆるは、不孝の道なり。

とありて、復讐を深く戒められてある。瞋を以て瞋に報ゐ、打を以て打に報ゆるを得ざれの句の如き、たとへ佛子でなくとも、凡ての人が服膺すべき金言である。

◉佛心者大慈悲是也とあるが、今の梵網經に照して見て、如何にもと首肯せらるゝのである。

◉一切衆生互呑食の世の中だ、利慾だの、名譽だのと云ふて、自身の爲めを計るのみである。孟子が譽を鄉黨隣里に求めずと云ふてあるが、味ふべきである。

◉一生涯の中で二たび死を決した、三たび死を決したなどと云ふ人あるが。顏眞卿の廟の記を見ると、イッデも義の爲めに死の覺悟を定めて居つた人である。こういふ人は容易に出現するものではない。古人曰く。生を棄て義を取らむのみと、是等の人を云ふたのであらふ。

◉御妙判に曰く。

日蓮は若かりしより、今生の所りなし、只佛になる斗りなり、と。

◉法を聞いて詩を見れば、妄也と古人が云ひし如く。僧敲月下門の句に敲の字がよいか、推の字がよいかとて、多くの時間を費やし喜むで居るのが詩人の境遇だ。是等の詩人と雖、法を聞いて始めて百年の迷妄が醒め來るのである。

◉むかしは大黑と云ふたものだが、今は號して看病婦と云ふうだ。文明の御蔭ぢや。

◉薩の西鄉が月性と相抱いて海に投じた事は何んとも解せぬ仕方である。大方共に入水して月性を打ち沈めたのであらふ。

◉沙門は親を拜せず。

◉一齋曰く。

儒も亦古の儒にあらず、佛も亦古の佛にあらず。

◉眞の儒者もなく、眞の佛者もない事を痛罵した言で、一齋の見識の高い事は是にても分かる。

◉一齋に一人の狂女があつた。一室に閉ぢ込め置いて、自身毎朝樣子を見に行かれては、奇なもの、奇なものとの言を發せられたそうである。天地間に不思議の現象あるものとの意味か、或は可憐の聲か。

◉感化と云ふ事は至て難いのである。一齋の門人の中でも放蕩者が居つたと見えて、先生の話を聞いて居る時は感心して坐ろに後悔の思ひするが。扨門を出て〻一二町も隔つると

早や既に教誨の事は忘れ去りて煩惱の犬に追はれてしまふのである。たとへ一時でも後悔するやうならばまだしも賴母しいのである。

◎天子の喪に服するものは公卿と公方ばかりて、天下の諸侯は關せなかつた。そこて諸侯は天子の臣にあらざるかとの議論が起りた。

◎此間興正寺に得度式があつて、天台の村田寂順が行ふたろうだ。東西本願寺でも得度式は青蓮院て受くるのだろうだ。天台て得度式を行ふは親鸞聖人と慈鎭和尙との緣故あるからであらふ。が、天台には天台の式あり、眞宗には眞宗の式がある。而るに天台によるのは聊か奇異の思がする。

◎垂老屢看鏡。行藏獨倚欄の句あるが。自分も衰へたものである。

◎物事は一心でなくてはだめである。一心になれば憂も、悲も、腹のすいて居るのも忘れてしまふのである。

◎禮は庶人に下さず。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

本來面目

春は花夏ほとゝきす秋は月
冬雪さして冷しかりけり

（道元禪師）

風尚餘韻

魔鏡（つゞき）

（テニソン）

菊池曉汀

二

姫はひねもすよもすがら
くしく怪しき衣織りて
嘗て手をば休めし事ぞなき
窓の外面のそことなく
妖魔變化の聲きゝて
身にふりかゝるわざはひを
おぢておそれて一すぢに
たゆまずうまず綾衣織りて
露だに浮きし心なし
姫！シヤロットの姫！。

傍にたてたる明鏡に
浮世の影ぞあらはるゝ
うつるは何？ほご近き
河水は渦まき流れゆき
大路はくねりカメロットに。
つゞれまごひし賤の男や
赤き衣着し市の乙女は
歡樂の歌うたひつゝ
うち連れだちて歩みゆく。

或はたのしの小娘や
さては羊飼ふわらべらや
ゆたかに駒に乘りし老法師
晴衣着たる公達は
行くや急ぎてカメロットに。
ときしも碧なす明鏡に
雄々し武夫の駒に乘り
轡ならべしいさましさ、
あはれ眞心かたむけて
姫にかしづく雄の姿さも。

姫はおさとる手を休めずに
鏡にうつるさまぐを
綾に織りてぞたのしめり。
寂しき夜半の野邊送り
喪服に鳥の毛を飾りなし
松明かざして悲しみの
樂を奏して葬列は
カメロット城にねり行けり。
或は月てる其の夕べ
若き女夫のむつやかに
打ち語らひて來りたる
影見て姫はと息もらしぬ。

三

姫が住家の軒端より
出でし雄々しの鎧武者
草の小路を冴へわたる
月の木陰の枝葉越し
ランスロットが胸當や
若草野邊にかゞやきて
持てる小楯の面をてらすよ。

珠玉を鏤めし轡は——
夫の河原に連れる
早かとばかりかゞやきて
歩めば胸の鈴の音妙に
浮きたつばかり鳴りひゞき
カメロット城に進み行く。
かくて綾帶革、銀の笛
目まぐるばかりかざりたる、
駒の歩みに鏘々と
鎧はひツくシヤロットの島まで。

一天青く晴れ渡り
金覆輪の鞍は黃に
鐙、前立、紅に
もゆるが如き紛裝に
駒を早めてカメロットの城に行く。
譬へば澄みたる月の宵
銀河のあたり尾をひきて
隕星一つ飛ぶに似たるよ。

ひらけし額はうつくしく
漆に似たる黒髪は
背にまかせて垂れしまゝ
磨きし馬の蹄は美に
鞭さへあげず除々と
影をば河にうつして
ランスロットは歌ひ行く。

姫は織る手を休せつ
二足三足思はずも
歩みて白き蓮も見ず
兜、鎧、に、みとれたり
遙か、カメロットをながめ入りぬ。
俄かに機は斷れたり
綾衣は散りてたゞよひぬ
たちまちくだくる明鏡は
只眞中より割れてけり
「祟りは來ぬ」と姫は叫びぬ。

四

荒ぶ風に木の葉散りて
背く繁りし森は痩せ
川浪高くたちさわぎ
闇とひろごる雲すさまゝく
カメロット城を蓋ぼんす
姫は城をば逃れ來て
垂柳の下に漂よへる
主なき小舟に身をまかせ
舳に書きし文字や河、

「シャロットの島の姫」と。

ものみなすゞき河の彼方
己がわさはひ占ひる
おもやつれせし豫言者の
悲くと觀念し時の如
うるはしの面うちたれて
姫はカメロット城を振り返り見る、
かくて近づく黄昏に
攬を解きて舟に伏しぬ
滔々たる河水は
姫を載せたる舟流しゆく。

疾く流れ行くさゝ舟に
かろく舞ひ散る木々の葉に
右に左にひるかへり
凪悽しき眞夜中に
姫はたゞよふカメロット、
悲くて岡そへ背柳の
下をめくりて流れゆく
舟の上にして口ずさむ
姫が最後の歌消えぬ。

とふよき歌も哀歌と
今は亂れし調さへ
止みて浪たち風狂ひ
血汐は凍り眼はかすみ

物ことゝく昏うなりぬ
されどながむるカメロット城。
流れにまかして流れゆく
水涯みなき潮の上
身はうきつかれてそのまゝに
姫は斃れぬシャロットの姫。

高殿の下、御簾の下
さては長廊、花園に
姿さびしき乙女子が
おぼろのみかげさまよひぬ、
城は悽絶内に滅ち
たゞ寂として人もなし
豊さへすゞきカメロット城。
武士市人あた人や
男女老若はせ集ひ
堤の下に漂よへる
舟の舳の筆の跡
讀みて哀愁の涙うゝぐ
「シャロットの姫」の名を。

こは何、こゝにあるは誰ぞと
燈火あまたかゞやきて
武士のうたけも歌みて
諸人はおぢて恐れぬ
カメロット城なる人
されどランスロット只一人
靜かに唱ふ聲や何
「此の乙女つらゝうたし
心安けく成佛せよ
シャロットの姫」

（完）

新刊紹介

◉釋迦史傳　東京　森江書店

常盤、近角、吉田三文學士の或講習會にて講述せられたるを集めたるものなれども、体裁の完備せる、文章の一致せる、殊に三文學士の自ら校閲の任に當られたるを以て、決して他の粗雜なる者と同一視すべき著書にあらず。且つ三文學士が三人三種の見地よりして、三千年前の偉人以上の偉人、即ち大覺世尊を抽きたる事とて、或は史乘の考證あり、或は一代の化導を説くあり、或は釋尊内心の實驗を寫すあり。峯巒起伏の眞景坐して伺ふべきもの、それ此書ならむか。文章の平易甚だ喜ぶべし（定價三十五錢）

◉鬼だまし　巖谷小波編

世界お伽噺第五十九編の卷也、卷中上下の二編に分ちて其上を鬼だましとし、其下を命の在所とす。共に瑞典、諸國お伽噺の中より選びたりとの事也。題名の如くある羊飼が鬼に羊をさらはれ其仕返へしに鬼をだまして遂に盲目とならしめ、羊を取返へしたる奇談也。下編の命のありかは更に奇の奇なるもの、少年諸君の一讀せざるべからざる書也。（東京、博文館、定價八錢）

◉少年日露戰史　小波編

第四編南山の卷也。南山の攻撃は非常の難山として傳へられ。優に戰爭史の頁を飾るに足るものとす。本書當時の狀況を説き得て掌を指ずが如し。始め第三回の旅順閉塞より説き起して、我軍の輸送上に及び、遂に南山の攻撃戰爭に及びたるは、著者の苦心の存する所を伺ふに足るべし。何政に閉塞を行ひしやに就ては、少年諸君の先づ答ふるもの少なかるべきを思へば、此用意あつて始めて少年日露戰史と銘を打つべし。挿畫の豊富亦誇りとするに足る。（東京博文館、定價十二錢）

◉強眼法　井上豊太郎著

健腦法、強眼法、皆同一の種類と見ば誤なし（本郷、文明堂、定價二十五錢）

◉二人半助　小波編

三人の兄弟ありて末子を半助と云ふ、これ本編の主人公也。愛閑士のお伽噺に、

して教訓的の意味多く含れるか如し。世界お伽噺第六十編として刊行せられたり（東京、博文館、定價三十錢）

◎病魔降伏　小波編

世界お伽噺第六十一編として出づ、其豫定の六分以上に達せり。小波居士亦勉めたりと云ふべし。こは露國の物語のよし、原題は病魔と聖像と云ふ意味なるが、口調の滑かなる邊より病魔降伏とせられたりとの事也。若し然らば悪魔降伏とせられむに更にふさはしからずや。編中の物語の筋先づ悪魔とするも甚だ差支なきが如し、著者の一考を望む。（東京、博文館、定價八錢）

◎道元禪師　峰玄光著

教界偉人傳として道元禪師を擧げたるや、可也。されど我等の望む所は歴史的事實を矢鱈に叙述せんよりは、如何にして偉人の面目を抽き、之を今日に活現し來りて腐敗せる教界に向て一道の光を放つにあり。本書第十一章に於て禪師の性格一項あり。之を讀むで稍々失望せり。辨道話、洗面等の警句を錄したるに過きずと云ふも可なるが如し。吾人は本書をからずして直に其遺作によりて梗概を知ることを得べければなり。或は吾人の望や大に過くべきか、一般の讀書社會に取りて此種のもの喜ばれるゝかも知り難し。二百頁の大作、著者の苦心を思へば、彼是評するの酷なるを知る。戰爭の今日、かゝる書の出るは喜ぶべき現象なりとす（本郷、文明堂、定價四十五錢）

政教時報

編輯だより

◎秋は都に入り候。朝顔の光りは次第に失せ、虫の音はたゞ〳〵に細りゆき、風は身に泌む思ひして秋は矢張秋の如く感ぜられ候。

◎彼東洋移民會社より、メキシコ國ボレオ銅山に送遣せられたる、五百の移住民は氣候風土の異變到底生活に堪へがたきとて往復六旬餘の長日數を空費して、彼の地を引き上げ歸來、會社と衝突のありし事は、新聞紙上に發見する所なるが、其是非曲直は吾人の固より知り得る所にあらざるも、かゝる葛藤の生じ來りては將來の移民に取りて甚だ不幸なる出來事と云はざるべからず候。近頃副監督として移住民をひきゐて彼地に赴きたる波佐谷氏より一片の消息を得たるまゝ左に掲げ可申候。

拜啓、出發の際は種々御配慮を煩き難有御禮申上候。神戸出航後約一ヶ月の長航を無事に去月十六日此地到着仕候。而るに二日目より移民學て迷信の極、勞働を拒み其結果一大騒擾を惹起し、小生の如きは急所を打たれ氣絶致候程の暴行に出遇申候。如何にも處置に苦むより遂ひに送還の事と相成、茲に小生の樂も大頓挫を來し候、たとへ涙々の身となるまでも、一奮發の覺悟にて、或條件の下に居殘りたる移民を監督する淺理合となり、此地に踏み止まることと相成申候。之も約二ヶ月位勞働の後、對岸テヒツク附近の耕作地に轉嫁する事と相成可申候。先づこんな有樣にて人の知らぬ苦勞致し居候。兎に角日本人の迷信強き事にはあきれ入候。彼等は國家のため、個人のため、朋友妻子を棄てゝ千里の波濤を横きりし勇者なりしに、信仰心のなき事とて、如何にも殘念なる事に相成候。此地にありて日本内地にあると同樣の心地致し、敢て天涯異郷に在るを忘れ申候。これメキシコ人と我等とは接近し易く、つまり何處も人間は人間にて人情は變らずと存候。火山破裂後の土地とて面白き事も無之候。早速御報知可申之處騒きやら怪我等にて執筆なしかたく失禮仕候。追て迷信の極、移民諸氏の演ぜし出來事に付詳報可仕、たしかに研究の料と相成可申候。早々

八月　墨國ボレオにて

◎妙心寺事件なるもの相起り候よし、教界の爲め悲むべき事に候。

◎鷲尾柴石師は黄壁宗管長に當選、近日晋山式を擧ぐる由

◎村雲尼公は故一品邦家親王第十王女にて、伏見宮大將貞愛親王御實姉に候。頃來篤志看護婦人會京都支部長其他諸種の會に御盡力中、近什として左の三首を示され候由に候。

征露皇軍の連戰連勝を聞きて

擊てばとり戰へばかつ皇軍の
みいつかゞやく海に陸地に

武士の堅きこゝろに碎かれて
城も砦も殘らざらむ

鈴の音にかちをしらする一片の
かみのたよりを待ぬ日でなき

◎遼陽の大戰も目出度我皇軍の勝利に歸し候。死傷者の大なるは云ふまでもなき事ながら、將校士卒の奮戰勇ましき事に候。

◎英國の輿論變調を來したりとて、俄に狼狽の体甚た見苦しく候。何故に我國民は自ら信ずる事の薄きや。兎に角自信力の欠乏は國民の病根として相警すべき事と存し候。

◎「仰臥三年」の著者近藤常次郎氏逝き。我日本水兵の母として榮稱せられたるマクレン孃の訃音、遠き海のあなたより傳はり候。又悲しく候はずや。

◎求道學舍の日曜講話本月十一日の日曜より相始め候。

◎學舍の諸氏も大抵歸京打揃ひ、談笑の中に宗教的生活を送り居候。

◎此度學舍擴張の結果として、新に入舍の諸君は如左候。佐々木哲郎。鶴田多八、東新、大峽秀榮、藤井竟、今井正親（以上文科大學）山路健之助、谷口成美、小野助逸の九氏に候。

◎九段第二求道會も本月十日より開演致候。

○第一卷第一號　實切

秋風錄

一

拜啓

朝夕秋涼日々相加候處、大光之下愈御清安之御事と奉存候。當夏嵯峨にて拜暇之節は失禮申上、種々御高示を蒙り今に胸中所得不少樣に感居候。其後東奥北陸枯渇の地に法雨を灑きて今は秋風と共に御歸舍の御事と奉存候。次に小弟其後幸に無恙消光致候に付乍憚御省意御願度候。

前號求道拜見仕候。大兄が軍人への御書翰讀み行く内に何となう、溫かき靈氣に包まるゝ樣に感ぜられて、近頃最も尊き文字と致存候。小弟は乗て歎異抄等も難有感居候へ共、祖師の御消息や唯信文意等に何でもなき經釋の漢文を愚鈍の者にも了解されるやう、一々クドクて讀まれぬ程に和らけてある所を拜見しては、其親切に思はず涙をこぼし候。是にて自然に溢れ出てたる宗祖の化他法も大抵は想察せられ、議論理屈に人は感化せられるものでなく、自然に溢るゝ溫き眞情に繋かるゝものといふことをよく〳〵味はれ、此點に於ては歎異抄よりも寧ろ唯眞抄等に宗祖の眞意目を認め居り候。眞意は常に文字の外に讀まれ居り候。世をあげて高論卓見で固めた中に、獨り求道の斯く立脚地より御靈感相成居り候は誠に御同意の次第に存候。

次に親經に就ての御見解も難有拜見致候。本願の妙藥の親經の病んで効顯るとの套說今更活きて味はれ候。但し親經に於て觀佛主義と念佛主義との相違は單に議論にはあらで、先德古聖の實感上からも甚だ大切の問題と存居候。他日再び機會もあらば何分の御高示を仰き度と奉存候。

近時教界の現狀に對し失望する者多く、僧界の元氣消沈の樣に見受け候。某教師が基教に轉したとかで「一葉落ちて天下の秋」などつぶやく聲も聽き候。是も自然に任すより致方も無之、併し寒霜烈烈萬葉落ち盡して、而して後に松柏の色自ら現るゝの時來るへくと獨り慰め居候。將來何分の御叱咤奉希望候。

戰事は慘劇を極め、本山は逼迫に陷り、世の中は樣々にて候へ共。秋骨の凉氣骨に徹する時、燈下靜に古經に對し、先聖古經に親み候へは無限の靈味胸に溢るゝを覺ゆ候。此に生活の光明を看出すを得たるは何よりの幸福と感謝致居候。東

山聖墓の邊漸く萩も枝頭に亂れ咲いて徐ろに昔なつかしき頃に入り候。時分柄精々御自愛被下度候。頓首

九　月　　京都にて　　大須賀秀道

二

今回弟友雄の戰死に逢ひては今更の如く一種名狀すべからざる感想に打たれ、戰死者に對しては是迄の氣持とは全然異る同情心涌出づるに至れり、凡て物は實驗的と云ふが、我等が胸に新に涌き出づるに至りし同情心こそ眞の同情、眞の涙なるべきか、勿論大君の爲め捧げし友雄の死は名譽なり、私情を挾むべからざるは固より之を知る、されど弟の戰死に就て少しく語らしめ玉へよ。

友雄戰死の狀況に就ては木下二等軍醫、〇〇本部、同僚某看護手其他同村及近村の出征兵士より通信あり、木下軍醫の書に云く、去廿四日〇〇背面の一なる〇〇〇〇攻撃中、身に寸鐵を帶びざる看護手の身にてあり乍ら、前進部隊に引續き戰線に出て、他の者が危險を避くべしと申せしに係らず、奮然進んでいよ〳〵危險の地に立ち傷者救護に從事中、午后一時頃敵の巨彈眼前に爆發し前額を破られ其場にて即死致せり云々、又彼と共に戰地に在りて彼が死を見屆けたる看護手羽柴某なる者の其父に寄せし書に云く、廿三日夕我が第〇〇〇は減十て漸く〇〇三個を編成するに至れり、此際第〇〇隊よりは羽柴、第〇〇隊よりは八田、第〇〇隊よりは增田看護手各出願して之が隊伍に從ふ事となり、同夜前進夜襲を行ひ、各看護手必死となりて之が救護に從ふ、翌廿四日午前引續き亦救護に從ひ、午后一時三人寄りて穴を掘り復救護に力む、間もなく敵の砲彈一發二間餘の處に破裂し破片二寸四方餘のもの八田看護手の正前額部にあたり即死を遂げたるも我等兩人は幸にも無事なり云々、彼友雄が死は如此にして明白に相成申候。

今より願へば彼が絶筆なりし去月十六日出の手紙によれば、死ぬるなら負傷又は傳染病等の爲後送せられて死度なし、寧ろ敵彈の爲即死したしと申越せしが、彼が望は果して識なせしものかあはれ立派なる最後を遂げし事と存候、彼はかねて我より珠數を持ち行く處あり出發の砌生は今春大兄より頂きたる近角氏著信仰之餘瀝一部を贈り、戰餘よく熟讀玩味せよと申傳へしが、戰死の際必ず帶び居りし事と信ず、嗚呼いかにしても忘れられぬか、六月二十九日早朝停車場にての別れは實に終生の決別なりしか、素より今回の戰爭は日露分け目の戰にして其戰に直接預る事を得るは眞に面目と存する處なれば再び生きて歸らふとは思はず、又決して歸る者とは思つて呉るゝなと知る人毎に申して居り、我等も亦再び此世で逢ふべきものとは露思はざりしも、いよ〳〵戰死の確報を得るに及んでは骨肉の悲しさ、事眞實也と信じつゝも其中から尙ヒン〳〵ハヲて居る樣な氣もせられ、彼が姿は眼前にあり〳〵と見え、いつかな腦裡を去らず、幾度か信せんと欲して信する能はざる次第に候。

自己の職實を全せよとは我かは始め我等の呉々も申し聞けし處、彼れ亦我等が諭を待たずとも自己の眞心に恥つる如き事は決してせぬから心配なせそ、唯我は年來少しく脚氣の氣味あるから其のみが氣になつて堪まらぬと申居れり、其后戰地よりの手紙に依れば軍醫及看護手は全く救の神か慈悲の佛の樣に將卒一同より思はるゝに付ても皆自己の職實の重大神聖なるを頼み、死傷者を見ては可愛想て〳〵助けずには居られぬ、て假令危險の場合にて他か躊躇の模樣ありとも我は挺身進み出てゝ之か救護に勸めずにはゞーしても居られぬと、彼か身は非戰鬪員なりき、彼は實に一衛生部員なりき、而も彼か身は風前の燈なりき、彼や彈丸雨中の間克く救護に勉め自己の本分を竭くし、遂に砲彈の爲頭部を割られ、望の如くアッと思ふ隙もなく暗明界を異にせしこそ、頗る滿足なる一念にて、聲さへたて得ず逝きし事と信ず、彼が頭には定めて滿身唯是慈愛救護の外、欲なく利なく邪なく妄なかりしなるべし、嗚呼彼が心境は明珠の如く、又月の如く恰も三千の諸佛が足ぶみし給ふ間に於て彌陀佛が奮然立て我等を救はんと誓ひ給へし御心と等しかるべきか。

彼が廣嶋を立ちたるは七月十六日なりき、二十四日〇〇〇上陸、其月廿日の戰爭に於て彼と小學同窓の兵士二人、敵彈丸の爲共に戰死せり、彼れ其新墓に詣てたる際は無念の涙せき上げて止まず、十錢にて求めたる蠟燭壹本を二つに折りて之を供へ、草花など手向して心斗りの廻向を申したりとの事なりしが、數週の後には敢なくも彼れ亦手向けらるゝの人とはなりぬ、先の戰死者は當時戰死者少かりし爲、彼れ他の戰友を指揮して火葬に附したる樣子なるも、彼の如きはたとひ他の看護手の共に居りし者ありとは云へ、其敵彈に近きと、戰友の多く〇〇せしとに依り、別に之を火葬にも附せず、戰后數日、肉爛れ蛆涌きたる儘合して土葬せられたるならんと云ふ事也。

彼か廻向したる兵士の中、一人は老親と弟一人を有するものにして、其弟亦騎兵として軍に從へり、彼は長く廣島に滯留せし事とて兄の戰死を廣島にて老親の急報により初て知りたるもの、越て幾日彼れ騎兵いよ〳〵渡清、道すがら計らずも亡兄か新墓に出逢ひしときは、万里遠征の一兄か斯る處に於て露助の爲空しく戰死せしかと思へば殘念やら無念やら悲しいやら遺恨やら、せき餘る胸の苦しき、たゞ墓標に取りついて泣て泣て泣きあかしたか、せめても心やりに遺骨を拾ひ上げ日夜之を背に荷ひづゝ戰場を驅逐し、亡き靈を慰みつゝありとは、なんぼふ憐なることならずや、思ひ見よそ兩親の心を。

我か叔父の長子に知一郎なるものあり、去月下旬出征の前に上る、母と長兄色々の物を友雄におくるべく彼に依托し、彼れ亦友雄に面會するを樂として出發す、其後の報に云く兩三日中に前進、友雄樣には必ず逢ふ事を得べく御依頼の品や、故山の話に嗤樂しき一夕を語りあかすを得んかと、而も逢はんと樂みし友雄は既に業に此世に在らず、神なちぬ知らぬ身の友雄か戰死を聞きし時の驚きやいかに、失望やいかに。

尙先日歸宅の折も一里餘隔りたる某村の一老媼友雄の安否を尋ね彷我家に來り、息子の某も友雄樣と同卜中隊にて常々逢來して居りましたが病氣の爲先發をはづれ、漸く去一日出發せり、其際云く戰地へ行つたら、たとひ負傷したと聞かれても決して心配しなさるな、同卜隊には親切なる八田看護手の居らるれば御安心して玉へかし、我は一日も早く看護手に御目にかゝる事を樂みとして行くと、其息子や我等か弟戰死の確報を得たる月の六日廣島を發せりとの事なり、思ふに彼が一心に其母を慰め、樂みて尋ねんと希ひし人は今や遼東の土となれり、彼が上陸後の落膽は蓋し想像外にあるべきか、老媼は息子の落膽を推想し、上陸後息子がいかにボロコイ顏をして居るかと思へば一層可愛想てならぬと云ひ人目もはゞからず號泣し、此話を聞き居たる母と我はさきの知一郎の事共思ひ合はされて諸共にいたく泣きぬ。

一体我弟は言寡くおとなしき方なりき、彼や中學卒業後一時郡の中央なる津幡町高等小學校にABCなど教へつゝありき、爲に我等よりも彼を知れる者甚だ多し、從て彼が人と爲りをわきもふるものから、誰一人厚き同情を表して吊せざるものなき次第である、就中笠野小學校長村田伊雄なる人並にさき頃文科大學に入られたる古道秀君の御親父の如き、戰死の報と共に深き同情と泣とに暮れられ、經を誦し其上一週間精進をして下さるゝと云ふ事である、亡き弟の爲感泣措く能はざる次第で、御禮の申し樣もなき事也。

今春戰を宣し給ひし后、隊に在つて郷の先輩なる西田大尉（四高校の西田幾太郎教授の弟君）の爲に撮影せられ、大尉頗る斯技に長ず寫眞道樂の名あり、而して其大尉―弟か半身を殘されたる其大尉は弟に先て斃れ、寫されたる弟亦大尉の后を追ふて斃る、一葉の寫眞凡て斷腸の種子に候彼か生きて歸ろふと思はざりし微として、此頃彼か遺し行きたる凡ての物に付ていよ〳〵然るものあり、彼は些細の事迄能く整備し苟くも一糸亂れずと云ふ風がある、一寸氣の附き兼れるものゝ如き一々附箋して一見之を明ならしむる等萬事用意周倒なり、知己朋友とより送りたる一葉の端書、一封の手紙の如き彼か廣島出發迄（出發前日生か長兄と廣島にて分れたり）の分皆保存せられてあり、最も信書保存の事は生亦十年一日の如く之を爲しぬ、是れ或は我れ同胞の奇僻かも知れぬ。

由來我は精神的と共に多少物質的者にて死生に就て解釋を下し獨り早合點し或は生老病死、五蘊假和合の考を以て解剖臺に對し又は婦人科診察臺に對す、而も時として全然形似下的考に充され、極端にも淺見にも、人樣の其親近の死に付て深く悲み悼まるゝに際しても馬耳東風平氣の平左て濟まし切つた、實に我が亡き父の臨終の時の如き、兄弟姉妹崩れん斗りに泣き悲しむに係らず、我のみは肆深くも、斯る場合に斯る病氣の爲に斃るゝは老の身の醫學上理の當に然るべき處と云はぬ斗りのつら附にて涙一滴落さなんだ、無神經と云はふか薄情と云はふか、恩知らずと云はふか、然るに今回弟の死に對しては悼むべき父の死に泣かざりし我の、何となくおのづから一種不思議の感慨に打たれ、涙の滂沱たるものありて禁ず得ぬ次第なり、加之從來戰死者の報に接する毎に只氣の毒の至りとのみ思居たる我も、弟戰死の報を得たる刹那より頗る血あり涙ある一種意味深き適切なる同情を表する樣になりぬ、即ち物質以外殊更に一種云へばからざる精神的感想に打たれたる樣の思かする、凡て物は實驗又は實感と云ふか我等が今の心も亦精神的實在か。

弟に付尙又遺されたる我等、逃度事多きも何れもなき兒の齡を算ふる愚痴に過きずして、余りくだ〳〵敷、劉覽に供するを恐れ之にて擱筆しぬ、あはれ〳〵、さらば劍虹兄よ、南無阿彌陀佛。

九　月　　金澤病院産科室にて　　八田智證

三

秋のあはれは雨にこうあれ、朝顔の先をれたる、栗のいがの落ちたる、何れか哀ならざらん。ましてこほろぎのかよわき音に鳴きいでたる、うれも要こふにと一としほあはれ深かしや。

訪なふ人の靴ぬられしたる、下駄の緒きりたる、未だ見え水のかさも思はれて、濁水の滔々たるを憂ふ。

木枯のはてはあけり海の音

濁涙澎湃たる大海の漫々として怒れるさま其處に自然の壯美の姿はあるなれ、サプライムは秋の定調か非か。

秋の思は愁なしともなほ哀調の涙こぼるゝ所にこうあれ。女郎花、梗かるかや、な始めすゝき尾花も今盛りなり。さあれ咲き出づるも枯るゝも同十野邊の草花、何れか秋にあはて果つべき。秋は秋官の如し、奚醯を問はず、其の行く末の運命に行かしむ。秋の哀は寂靜にあり。さる程に黯殺の氣の滿ち金風颯として來らば、秋の悲は殺氣にあり。寂靜は秋の一面にして、殺氣は其他面なり。此の殺氣は吹いて來る冬の大寂滅の姿を現ずる序幕なり。燈火滅せんとして一度明なるものなり。スピイザが靜觀三昧も秋の面影ならめど灰身滅智を說ける小乘も又其の面影ならでやは、自然は多面なり。見る人の鏡のまゝ如何なる姿をも寫すものなれ。よわりゆく虫の音に亡き友の身の上など思へば、秋は漫に物かなしけれ。

きりぐすや夜寒に秋のなるまゝに
よわるかこゑの遠ざかりゆく

西行の歌なり。

我が爲めに來る秋にしもあらなくに
虫の音きけばまづぞかなしき

古今集の歌にて讀人不知と有之候。

和軒生

四

在遼陽　安藤鐵鵬

（1）

廿六日午前一時海城縣安村堡子を出發、師團に從ひて前進。廿七日鞍山砧占領、引續き遼陽の前戰に移り三十、三十一の兩日は首山堡の大劇戰。一日より遼陽攻擊となり四日全く占領。此間十日間山に伏し野に臥し導明寺を喰ひ生鹽を嘗め、アラユル辛苦を經驗す。三十、三十一日の戰爭は戰史ありて以來稀有の大戰爭砲彈頭上を掠むること幾回、危險を感ぜしこと數回、然れどもその快に至りては亦冷暖自知の境に在り、病氣全快軍に從ひて行進せしより元氣百倍す幸に御安慮を乞ふ。

九月五日

（2）

露重き高粱畑の寢覺哉
朝霧や衛生隊の見えがくれ
朝露や昨夜凉々しき豪の者

九月五日

（3）

世界稀有の大戰に從ひ砲彈雨飛の間を潛りて本日遼陽の舊都に入る、黑鳩公が昨日迄の官邸、獨り殘の美を恣にし、洋風の庭園百花妍娟として香氣芬々たり、花瓣を上げて仰くが如きは既に走れる舊主を求むるに非ざる乎、

九月四日

（4）

戰後の光景は慘憺たるもの、戰終て未だ幾干ならず、血腥き戰場を踏破す、死屍累々山を築き、碧血流れて川となす、鐵條網に半身を委れて銃丸に斃るゝもの、罕筆に陷り木槍につかれて死するもの、血の池の如き塹壕に落ちて溺るゝもの露兵と組打せし儘に命を損せるもの、首なきもの、四肢處を異にせるもの、毒汁を吐くもの、火藥に身を燒かれて全体爛爛し膿腐露出せるもの、見るからに涙の種ならざるはなし、嗚呼戰爭は人心を壯にし、人心を悲に導く、人心を壯にするは砲彈雨飛の間を潛り死生の念を去て敵を屠り、陣を拔かんとする時、人心を悲哀に導くは新戰場を馳驅して其慘狀を目擊したる時也、然かも其中昨夜陣中第二線に在て余と親く戰況を談ず急に出陣の命を受け第一線に馳せ參ずたる將校兵士の某々あるに於てはその感想何とも云ふべからざるものあり、嗚呼戰は壯快也、嗚呼戰は悲哀也。

九月四日

（5）

本日遼陽城内に入る每戶日本國旗を掲げて我軍を歡迎す、陸軍通譯鳥居熊四郎氏（中西牛郎氏の弟）と共に某大家に至り憩到なる待遇を受く、支那人は辭令に巧也、交際に長ぜり、小生如き撲々漢大にテレ氣味たらざるを得ず遼陽は流石に昔の都、大厦軒を並べ、商賈繁賑、城壁高く聳え優に外寇を防ぐに足る、周圍一里餘。

九月五日

（6）

筒音は半里を去らず露の宿、
伏あるか鳥立ち騷ぐ穗麥畑、
秋の野や俄にふゑし土饅頭、

九月五日

（7）

本日是より歸國の途に就かんとす、第二軍從軍記者の數は大抵小生と前後して歸朝すべく候、外國從軍記者の三分の二又既に去り申し候、戰況委細歸國拜眉の節に讓る。以上

九月六日午前九時　遼陽縣ヌリンズイより

（8）

只今三十三十一日の劇戰地殊に雲霞の如き敵が群がり居りし首山堡山麓クーズヤズイに至る旬あり

秋の山鬼哭く聲のきこゆなり

六日十二時　クーズヤズイにて

（9）

六日午前九時遼陽縣ダリンズイを出發し此夜鞍山站に一泊行程七里、

鞍山站、鞍山や馬に飲ふ秋の暮

七日鞍山站出發、海城に着す行程八里、途上旬あり

甘泉堡の畑道　大方は折られし黍の戰き哉

此夜九時より徹夜歩行に決し時事の石濱君と共に三人の支那苦力を傭ふて貨物を荷はしめ終夜鐵道線路を歩み翌八日朝七時大石橋に着す行程八里、

鐵路歩む夜の路遠し人の川
稻妻や行く手を塞ぐ黍畑

八日朝大石橋に着し一休の後更に勇を鼓して營口に向ひ同日午後三時着、行程七里、五時船にて一里余ある營口の市街に行き市中を散策す、流石は貿易場也町並、店飾も舶來的也夜に入りて船は出てず道はわからず、暗さは暗し非常に難渋なして十一時迄漸く兵站部に歸る、九日朝十時御用船舞子丸に乘船、十三日午後八時門司安着　十四日朝　門司山田旅館にて

（10）

十六日京都南浮氏方一泊、十七日午後一時連技能淨院殿に面會、午后二時田中善立君の清國泉州に歸任するを停車場に送り三時新法主臺下に面謁、四時七分東上の列車にて歸京に就く。昨夜より今朝にかけて京都は暴風雨也損害多少、川瀨彥根間汽車不通。

九月十七日　草津より龜山に至る關西鐵道中

求道會館設立喜捨受領報告（第六回）

一金壹圓也　即納　第一高等學校　吉木一朗殿
一金二圓也　即納　府下羽村　中里庄五郎殿
一金五十錢也　即納　長野縣　高橋幸右衛門殿
一金五十錢也　即納　同　水野つる殿
一金十二圓六十三錢　即納　同　修養會聽衆中殿
一金五十錢也　即納　同　渡邊仁太夫殿
一金壹圓也　（三回）即納　在京　某子殿
一金拾圓也　即納　長野縣　伊藤傳兵衛殿
一金一百圓也　即納　近角常觀殿

右北信修養會の講話謝禮を近角より寄附したる者也

一金壹圓也　即納　信濃　林太吉殿
一金二圓也　即納　在清國　田中善立殿
一金拾圓也　内二圓納佐賀　木山銈子殿
一金五圓也　内一圓納同　木山十彰殿
一金壹圓也　即納　同　木山行善殿
一金壹圓也　即納　同　木山ゆく殿
一金壹圓也　即納　近江　淺見安之殿
一金五圓也　即納　某軍艦　太田文次殿
一金五圓也　即納　仙臺　道交會殿
一金拾圓也　即納　某軍艦　窪田重弐殿

小計　百六十八圓六十三錢也
通計　金千百四圓八十八錢也

求道會館設立趣意書

現時社會の大勢を察するに、國民に眞摯なる氣風頗る乏しくして、益々信仰の必要を感じ。一般に道義の制裁弛み去りて皆嚴格なる實行を想ふ。此に於てや青年學生にして眞面目なるものは、確實なる信念を攫まむとして胸中幾多の苦悶を抱き。社會實務の人にして志操清淨なるものは其理想を實現せむが爲に、人生問題の解決に辛酸を嘗めざるはなし。嗚呼信仰の饑渴現時の如く劇しきはなく、求道の志此の如く切實なるは未だ嘗て見ざる所也。昨年己來、聊か此の時運の必要に應せむとする微志あり、先輩の企てられし跡を引き繼ぎて、一方には求道學舍を設け。此等の道を求むるの人々の寄宿に充て、寢食を同じくして共に實踐躬行に勉め、また一方には日曜講演を開きて眞面目なる人々と共に心を潛めて信仰の問題を講し、互に心靈の修養に從ひしが。幸に佛陀の冥祐と、師友の同情とにより て其期する所空しからず。學舍は常に滿員にして幾多の申込に負き。假會場に充てたる居間は狹隘を訴へて求道の人々を容るゝの餘地なし。此に於てや止むなく、懇切なる道友の勸告に從ひ、學舍を擴張し、會館を設立して以て焦眉の急に充てむと欲す。幸に篤厚なる先輩の指導に從ひ、忠實なる親友の贊助を仰き、着實なる實行により て漸次其結果を擧けむこと是實に不肖の至願也。

從來首都に於て佛敎徒に屬するの會館の設なく、其不便を感する事一日の事にあらず。而して屢々計畫せられて、未た容易に實行の緒につかざる所以のものは、蓋し其規模大にして完全を期すればなり、故に先づ現時の必要に應すべき適宜の會館を設立して、漸次其大なるものに進まむとを欲す。是先づ本會館の建設を企圖して佛敎者一般需要に充て且つ清潔なる社交の中心に供せむと欲する所也。予西遊の際、泰西青年會の組織及會館の設備等を初として、幾多の社會的施設を詳細に調査し來りて、此等の事業の我國佛敎者の手に成らむ事を望む實に切也。本會館建設の如き若し燎原の一點火たるを得は幸之に過るなし。冀くば四方同感の諸士不肖が微衷を諒察せられ、協力贊助し玉はらむとを謹て白す。

明治三十六年十月

發起者近角常觀

（いろは順）

理學士　稲葉昌丸
理學士　池田榮吉
理學士　今山覺神
理學士　石川盛章
理學士　板橋成俊
理學士　北井喜八
理學士　今澤時敬
理學士　西條善七
理學士　本多時郎
文學士　朝倉三次郎
文學士　常盤大定
文學士　大内青巒實
文學士　大三十次郎
文學士　小藤文次郎
文學士　荻原雲平
文學士　岡田文次郎
文學士　和田治三郎

醫學博士　山内仲滋
醫學博士　原田貞介
醫學博士　田中賢道
醫學博士　櫛田芳治
醫學博士　吉田靜致
醫學博士　柏原孝次郎
法學博士　片山國嘉
法學博士　吉田文太郎
法學博士　高橋是清
法學博士　賓田鐵山
法學博士　月見覺了
法學博士　南條文雄
法學博士　村上專精
法學博士　上野理一
法學博士　久保天隨
法學博士　前田慧雲
法學博士　松本文三郎
法學博士　眞田増丞
法學博士　丸岡莊三
法學博士　藤井惠了

文學博士　藤井健治郎
文學博士　姉崎正治
文學博士　安藤忠道
文學博士　秋野孝道
文學博士　澤柳政太郎
文學博士　齋藤唯信
文學博士　佐藤愿海
文學博士　酒井雄哲
文學博士　境野黃洋
文學博士　橋本徳壽
文學博士　三宅雄二郎
文學博士　白井孝太郎
文學博士　島地默雷
文學博士　島好信
文學博士　新村猛
文學博士　杉村廣太郎

養育院幹事　文學博士　藤井健治郎

主筆　横井時雄　姉崎正治

時代思潮

毎月一回　五日發行

◎第八號　九月五日發兌　◎定價一冊廿錢郵稅一錢六冊郵稅共壹圓廿錢十二冊郵稅共弐圓卷十錢

目次

口繪
○ッツッ峯、昇天○收穫○香港三非物産會社に於る土村中將一行歡迎會

思潮
○對韓方針○現今の信仰問題○トルストイの大警告○平和的動物（師子王頌言）

論議
○神聖獨裁の理想を評す（横井時雄）○近代の文明と藝術とワッツの繪畫（姉崎正治）○戰爭と心海の二大暗流（吉澤義一郎）○自然力の發展（牧野啓吾）

想苑
○ワグネルの書簡（嘲風）○しゃくんたら姫（森田廿五絃）○靈のさゝやき（林筧水）○伯父（白水郎）

雜纂
○政局の近事（傍觀者）○オストルウスキー論（昇曙夢）○形式美術に於る日本（アーネスト、フォン、ヤンゾン氏編者抄譯）○小獅子吼錄（九皐生）○時局に關じ故郷の父老に與ふ（吉川潤次郎）

時評
○旅順陷落と祝勝○オレーウエと芬蘭（梧影）○第二次戰時財政計畫○敵艦逃竄と國際問題○韓國經營と昨今○歐洲外交界に於る獨逸の孤立○英國の西藏占領（曾水）○一種の女性迫害（三城）○『日本の文明と世界の同情』を讀みて所感を述ぶ（石山基威）

彙報
○日露戰史略○經濟時事
▲大藏證券の發行▲横濱入品近況▲海上保險率引下げ▲銀行臨時休業と大藏省▲郵便貯金利子引上げ▲韓國借款資金出所▲七月中手形交換高▲物價下落▲戰局一轉と商工業▲日本銀行と總會▲外債拂込濟▲京釜鐵道速成資金貸下決定▲白木綿暴騰▲秋蠶賣金の當川▲歐洲行貨物運賃劇
○海内思潮
▲國民の覺悟▲自由言論の效力▲佛獨二國と羅馬法皇▲輸出工藝品▲露國の軍資
○海外思潮
▲トルストイの戰爭論▲佛國とモロッコ▲露軍の困難▲日露の戰略▲佛國新聞開戰評英露と密獵問題
○内外雜俎
▲レシテリヌイ捕獲辯明書▲俘虜信仰慰安會の事業▲避暑地と保養地▲聯合醫會の醫師法案▲韓米電氣會社成る▲島地默雷氏の弔文
○新刊紹介　○日誌

挿畫
○ッツッ肖像、トルストイ肖像、韓國風景

附錄
○トルストイ伯非戰論

發行所　東京市本郷區森川町二番地　電話四谷二番

時代思潮社

教界偉人叢書既成の分

大内青巒先生校閲　峯玄光先生著

第三編
道元禪師傳
▲新版
▲菊版二百二十頁
▲上製六十錢税十錢
▲並製四十五錢税八錢

道元禪師は日本佛教史上の黄金時代とも云ふべき鎌倉時代に於て最も傑出したる高僧にして今や其院。一千萬の信徒を有する曹洞宗となり、日本佛教界に覇を院。一千萬の信徒を有する曹洞宗となり、日本佛教界に覇を禪師の眞面目を發揮し本紙上に活潑せしむ競ふて愛讀を賜へ。

目方は錄入用進呈す

第一編　小野藤太先生著
▲弘法大師傳
▲菊版二百二十頁
▲上製六十錢税十錢
▲並製四十五錢税八錢

第二編　境野黄洋先生著
▲聖徳太子傳
▲菊版二百二十頁
▲上製六十錢税十錢
▲並製四十五錢税八錢

高島圓先生著

第四編
一休和尚傳
▲新版
▲菊版二百二十頁
▲上製六十錢税十錢
▲並製四十五錢税八錢

元日に髑髏を振廻して人の度胸を抜き、末期に蕉を啼ふて梵天に捧げた彼一休後小松帝の皇子として、九重雲深きところに榮華の夢を見ようともせず一蓑一笠ただ平民的教化のために一生を送つた彼一休は痴か狂かた一大偉人か彼が眞面目、そは本書の上に躍動して居る

發兌元　東京本郷五丁目四番地　文明堂　東京神田神保町

布教大鑑は

● 文章は通俗にして其儘應用自在 ●

加藤咄堂新著

最新 應用説教學講義 全一冊 正價金三十錢 郵税金四錢

羅國佛起艱難の時に當り布教は刻下の急務にして好材料に急用渇望せらるゝ所之れを以て老練の布教家と雖も、尙ほ其材料の足らざるを憂ふ、本書は其缺を補はんが爲め博く東西古今の典籍を探り、其取つて以て布教の料に供すべきものを蒐集し、佛教に關する詔勅を大集し、英雄、豪傑、高僧、碩德の逸事美譚數百を掲げ、説明すべき因緣を加へ、更に佛教中の金言數百に各解釋を付し尙東西古今の名士の格言を掲げて佛教の發揮を證明すべく尤も巧妙なる譬諭は教の内外を問はず、廣くこれを集め、和歌、俳句の趣味あるものに應用を添へ數百首の多きに達し、史談には歷史上著名の事蹟を網羅して……

（豫約特價）

前金に限る

郵税金拾五錢

豫約價金壹圓

發賣所

東京市本郷四丁目 文明堂

京都市東洞院 村上書店

東京市内、京都、大阪 各地書肆

大内青巒居士校閲

加藤咄堂立案

三寶編輯局編纂

布教大鑑

全一冊 洋裝金文字入 價二圓五十錢 郵税金十五錢

（申込期限）

明治三十七年九月三十日限り

出來期限十月二十日

期限後豫約謝絶す

實談を補ひ智識の庫を開きては科學哲學等の大意と優劣便概を示して世界各宗教を對照し佛教を宗として佛法の顕揚に資し、統計を掲げては、世界の大勢、宗教、道德、法律等の現狀を一目の下に明白ならしめ諸種の戰時に對する布教の新資料を蒐羅し盡して時夜を照する探海燈となし殊に現代大家の實地應用のを主としたるを以て何人といへども本書によつて縱横無盡に布教の材料を得べし且つ嶄新なるリーダー索引を付して、絶て便ならしめたれば布教家の座右欠くべからざるの寶典なり、おもふに本書一たび出でゝ他の布教書は必ずや後へに瞠若たらしむ

發行所 東京市飯倉五丁目 森江本店 電話新橋二九七二番

千河岸貫一著 軍人布教 全二冊 正價金二十錢 郵税金四錢

今釋迦會著者著 秘訣口演 説教演説指南 全一冊 正價金廿五錢 郵税金四錢

伊藤俊道著 釋迦實傳記 全二冊 大和綴洋製 總ふりかな付 正價金六十五錢 郵便金八錢

ボールクラース著 鈴木大拙譯 佛陀の福音 全一冊 正價金五十錢 郵税金六錢

新刊 釋迦史傳 新刊

近來印度哲學の勃興と共に釋迦牟尼佛の研究漸く盛に、その結果を公にせるもの亦少からず、然とも其の書多くは高尙にして專門家の參考に適するに非らずんば卑近にして兒女の讀ものたるに過ぎず、本書は能く此の兩者の中庸を得て平易にして簡明、而も世上流布する俗の傳に依らず廣く南傳北傳の説を研究し深く古今東西の典籍を參酌し別に一識見を以て講述したる正確なる釋尊の傳を知らんと欲する者には最も適當なる良書なり、講述者は大學に於て哲學を專攻し爾後釋尊の研究に熱心なる常磐、近角、吉田の三學士にして

文學士 常磐大定先生

文學士 近角常觀先生

文學士 吉田賢龍先生

共述

菊版美裝全一冊 正價金三十五錢 郵税金六錢

製本出來

殊に本書の特色は釋尊の一代を太子時代の釋尊、修行時代の釋尊、説法時代の釋尊の三時代に區分し三學士各々その得意の部分を論述し而も卷を通じて論理整然たることたり卷尾には附録として常磐學士の釋迦種滅亡論を掲ぐこれ又多く得難きの文字學者之を讀まばその研究に少なからぬ資料を得べく、文士之を讀まばその思藻を豐富ならしむべく、詩家之を讀まばその想念を崇高ならしむべく、畫家之を讀まばその作品の參考となるべく、宗教家之を讀まばその道念を鞏固ならしむべし、志ある人速に一本を購て座右に供へよ

發行所 東京市飯倉町五丁目（電話新橋二九七二） 森江本店

發賣所 東京市本郷四丁目 文明堂 京都市東洞院三條下 村上書店

文學士清澤滿之同人著 靈界の偉人 全一冊 正價金三十五錢 郵税金四錢

加藤咄堂著 大乘佛教大綱 全一冊 正價金卅五錢 郵税金四錢

文學士 清澤滿之師序
文學士 近角常觀君著

信仰の餘滴

◎訂正增補第五版◎

全

●定價並製十五錢上製二十五錢●郵稅二錢●郵券代用一割增

本書は、著者が活火炎々たる自家の信念を告白したるものにして、活ける懺悔靈感の妙趣、此中に存せざるはなし、其說く所卑近に流れず、高遠に失せず。平易の裡、紛糾錯雜せる人生問題を捉へ來りて、よく之を調理し少しも生硬の憂なく讀者をして、戛然胸中秘奥の琴線に觸れしむるものあるを覺えしむ。

漸々版を重ぬるに臨みて、著者自ら筆を執りて、或部分の如きは全く改竄するまでに、嚴密なる訂正を施しぬ。添うるに森嚴なる筆を以て自序をものし之を卷首に題し、且つ滯歐中日拜夕讀したる聖經に就ての所感一篇を附錄とせり。句々皆金石の聲を發せざるはなく。字々悉く熱涙の痕たらざるはなし、苦悶の闇にある人、信仰の飢に叫ぶの士、來りて本書を繙けよ。光明界の指導者たるもの、それ必ず此書ならむ。

注文所　東京市本郷區森川町一　求道發行所

規定

一、本誌は毎月一回(一日)發行とす
一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事
　但郵券代用の節は五厘切手にて一割增の事
一、本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所通知する事
一、回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	郵稅一冊
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	に付五厘

●廣告料五號活一字行(二十七字詰)一回金拾錢

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし

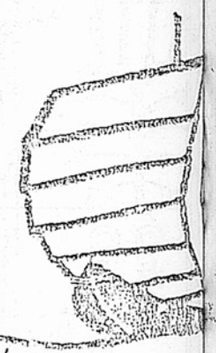
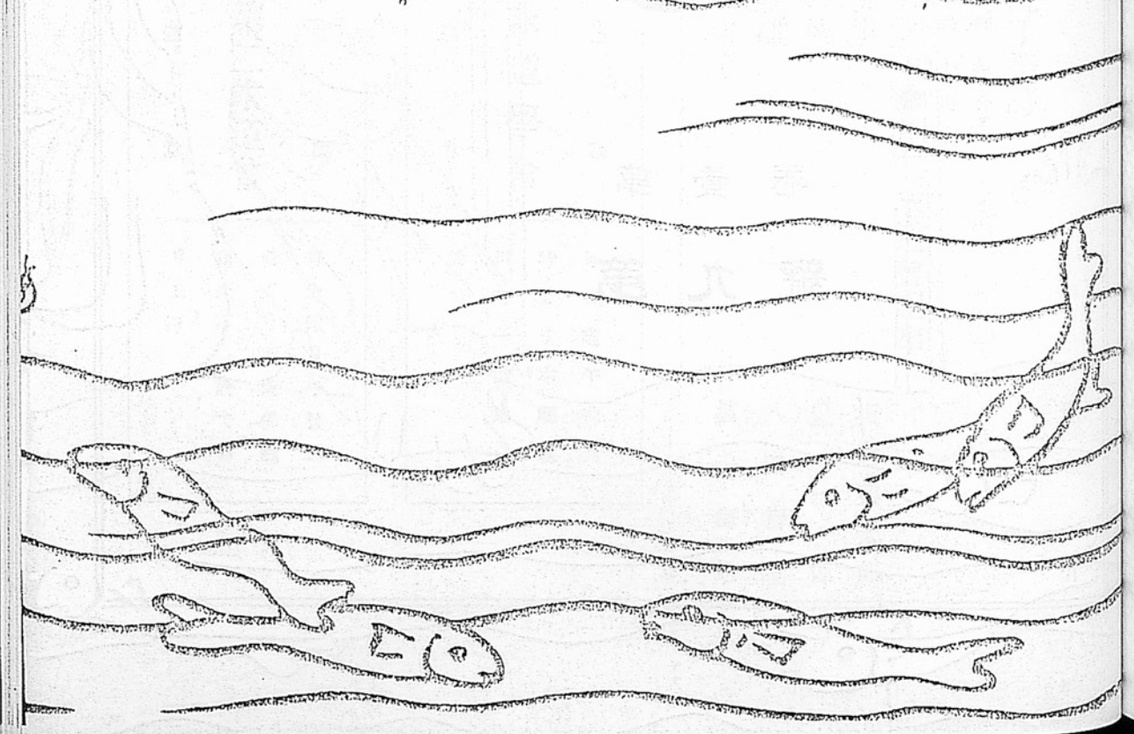
明治三十七年八月三十日印刷
明治三十七年九月一日發行

發行兼編輯人　百目木智璉
印刷人　白土幸力
東京市本郷區森川町一番地
發行所　求道發行所
(電話下谷二四三二)

東京市神田區神保町
大賣捌所　東京堂
同　本郷四丁目　文明堂
同

本願力にあひぬれは
むなしくすくるひとそなき
功德の寶海みちくて
煩惱の濁水へたてなし。

名號不思議の海水は
逆謗の屍骸もとゝまらす
衆惡の萬川歸しぬれは
功德のうしほに一味なり。

盡十方无导光の
大悲大願の海水に
煩惱の衆流歸しぬれは
智慧のうしほに一味なり。

彌陀の智願海水に
他力の信水いりぬれは
眞實報土のならひにて
煩惱菩提一味なり。